

## 第1日 10月13日(土)

シンポジウム I (10:00~13:00)

A 会場 (3114 教室)

ゼロ年代の小説 — ポスト・メモリー カルペ・ディエム 記憶の歴史化と今をつかめ

**Postmemory und carpe diem. Deutschsprachige Romane in den Nullerjahren**

司会：山本 浩司

今年 30 周年を迎える「ドイツ現代文学ゼミナール」では、68 年と 89 年という戦後史の断絶を経た社会と文学の変容について過去 2 回の学会シンポジウムを開催してきた。今回西暦上の切れ目にすぎない 2000 年を基点に選んだのは、世紀の転換を機に、ホロコーストや大戦など 20 世紀の災厄の生き証人たちの余命が尽きれば、未曾有の災厄の記憶もついに歴史の一頁に収められてしまう、という意識が高まったからだ。事実、最近の文学では過去との取り組み方も変わってきた。論じるにも値しないようなキッチュ化が認められるのは確かだが、災厄の記憶の伝承のためには「自伝的証言の神聖性を汚すことを恐れるな」と言い残した強制収容所の生き残りホルヘ・センプルンの思いをできるかぎり共有して、体験せざる過去に向き合う後続世代の文学が、どうすればただの美的遊戯に陥ることを免れつつ、当事者性とは別の文学的価値を提示できるのかを問うていきたい。

まず、20 世紀の歴史を何代かにわたる一族の物語に回収して提示する形式がゼロ年代に流行したのに着目し、戦争体験を第二第三世代が文学的虚構に書きかえていく際の「変形作用」がはらむ可能性（「体験の継承、忘却からの救済」と危険性（「キッチュ」）について考察を加えていく。その際、ホロコースト体験の後継世代による文化的継承の意義を問うために主として英米文化圏で提起されてきた「残像 *Nach-Bilder*」（ヤング）や「ポストメモリー」（ハーシュ）などの概念を援用する。もちろん、個人の体験と記憶が社会の共有財としての歴史へと変容していく過程は、戦争の記憶に限られるものではない。歳月を経て大胆な虚構化の余地が生じてきた「ドイツの秋」（77 年）と「壁崩壊」（89 年）という戦後史の転換期についても併せて考えてみることによって、時間的隔たりの程度に応じた「変形作用」の差を検証することができるだろう。

他方で、グローバル化のなかで大きく変容する経済や政治の現実に分け入り「同時代と同時代人の経験へ向かう力強い動き」（批評家ケメリング）もゼロ年代には認められる。知識人たる作家は過去から目を背けてはならないという道徳的な要請のうちにドイツ文学が同時代性を過度に軽視してきたという指摘が正しいとすれば、現代史に対する新たな関心とは一見矛盾するよう見える「今

をつかもう」とする姿勢の顕在化も、戦争体験世代の退場に連動しており、「記憶の歴史化」と表裏一体のものだと言えるだろう。

「記憶の歴史化」と「今をつかめ」というゼロ年代を代表する二つの傾向を検証するにあたって、すでに一定の声価を得ている40代50代の中堅作家たちの問題作を取り上げることにした。時代の空気を読むためには偏った人選かもしれないが、発表者がそれぞれのテーマ設定のなかで文学的質の高さも考慮に入れて選びだしたものであり、将来の文学史に残る名前だと信じている。

## 1. 孫世代による祖父母の物語

— ユリア・フランクとジェニー・エルペンベック

田丸 理砂

ゼロ年代のドイツ文学では、「家族」の歴史あるいは過去を題材とした作品が数多く発表されている。これらの作品には時系列に沿って一族の物語を語る古典的な「家族史小説」とは異なり、複数のパースペクティブやさまざまな時代の過去と現在が並列された語りの特徴がある。

本発表では、こうした特徴を具えたJ・エルペンベックの『Heimsuchung』(2008)と、それとは対照的な語りのJ・フランクの『Die Mittagsfrau』(2007)を取りあげる。エルペンベックの作品はまた、家族ではなく建物としての家が物語展開の装置として機能し、その所有者の変遷を手掛かりにドイツの歴史を描き出そうと試みているという点で、従来の「家族史小説」およびゼロ年代の家族の物語とも一線を画す。一方、作者自身の家族史にヒントを得た三部作のひとつとして構想されたフランクの小説では、過去の複合性や体験の継承よりも、物語性に力点が置かれている。

このように家という場所から家族を捉えるエルペンベックの作品の過去へのアプローチの仕方は、ひとつの家族にフォーカスする彼女の同世代の作家たちによる家族の物語とも異なる。こうした同世代作家としてT・デュッカーズやS・シフナー等の作品にも参照しながら、エルペンベックとフランクの作品を手掛かりに、最近のドイツ文学における新しい「家族物語」が、歴史と物語のあいだで揺らぐさまを分析する。

## 2. 戦争とDDRの残像 — マルセル・バイアー

桑田 文

マルセル・バイアーは、自ら体験していないドイツの過去と向き合い、「体験の継承」や「忘却からの救済」という問題に取り組む作家である。その際に彼は、過去の出来事を壮大なスケールでもって叙事的に物語るのではなく、気まぐれな想起を繰り返しながら過ぎ去った時代の断片を拾い集め、そこから過去

に対するある種のイメージを読者に喚起させる方法を取る。蒐集された過去の断片を分析してつなぎ合わせ全体を推測する作業は半ば読者に委ねられるので、作品を読みながら感覚を研ぎ澄まし想像力を働かせることを要求される。

写真やグラモフォンなどを好むバイアーはメディア論の観点から論じられることが多いが、本発表ではそれとは別に、ナチから戦後ドイツの東西分裂を経て壁崩壊に至るまでの長いドイツの歴史を捉える野心的な『Kaltenburg』(2008)を中心に、過去を文学的な虚構に書き換えて行く際に問題となる「蒐集」という行為に注目する。モチーフとなる鳥の剥製のコレクションや鳥類学者の眼差しが、過ぎ去る時間のなかに埋没していくものを生き生きとこの世に蘇らせ、言葉を失った死者たちといかに向き合うべきかを問う。そのなかでバイアー作品を特徴づける「蒐集」「観察」「物語る」という三要素がドイツの過去とどのように結びつき、歴史のキッチュ化から逃れるのに資しているかを詳しく検討したい。

### 3. 77年とテロルの残像 — ウルリヒ・ペルツァー

山本 浩司

赤軍派(RAF)テロと反テロの暴力が吹き荒れた77年の「ドイツの秋」という悪夢も30年の歳月を経て記憶が薄れてきた。確かに、ベルリンのRAF回顧展をめぐる激しい論争が示すように、戦後社会の傷口はまだ癒えきってはいないが、同時に文化産業の消費材となるほど着実に歴史の頁に組み入れられつつある。最近の文学でも、政治的背景から切り離れたテロリストの偶像化や、その反動としての脱神話化(L・ショルツら)の傾向が著しい。こうしたなか56年生まれのペルツァーの小説『Teil der Lösung』(2007)は、極左の戦闘的なモットー(「問題の一部となるか、解決の一部となるか」)を標題に引きながらも、後ろ向きの視線を排して、ベルリンの「プレカリアート」の生態に光を当てながら、D・パソス、D・デリーロらアメリカの都市小説に学んだモンタージュ技法を使って、9.11以降管理が強化されていく現代社会を多面的に捉えるのに成功している。ドキュメンタリー手法をとるFr・デーリウス『Deutscher Herbst』(1981-92)や、管理社会の暴力と書くことの暴力の対応関係を内面性の極地で表現したR・ゲッツ『Kontrolliert』(1988)など先行作品や同時代の若手作品と比較するなかで、ポップと政治性の中間に位置してテロをいわば「残像」として提示したペルツァーの独自性を浮き彫りにしていきたい。

#### 4. 89年とゼロ年代のDDR小説 — ウーヴェ・テルカンブ

熊谷 哲哉

本発表では、東ドイツ末期の社会を描いたウーヴェ・テルカンブの大作『Der Turm』(2008)における、世代の異なる登場人物たちによる歴史の語りという手法、そしてそこから見える歴史認識について分析する。この物語は、82年12月から89年11月までの、ドレスデンの高級住宅地に住む知識人の一族を、17歳の主人公、50代を迎えた父親、そしてソ連生まれで68年世代の叔父、という三者の語りを通じて描いている。このような本作の手法は、しばしば比較されるトーマス・マンの『ブッデンブローク家の人々』のような、世代間の確執によって隔てられた、特権階級の家族の物語とも、いわゆるオスタルギー的な懐古主義とも異なる。冗長とも言える語りを積み重ねることで、テルカンブは、DDR末期の状況を緻密にかつ多層的に描くことに成功している。

歴史の語りという問題と密接に関係しているのが、『Der Schlaf in den Uhren』(2004)および近作『Die Uhr』(2010)など、テルカンブの作品に多用される時間や時計のモチーフである。物語の随所に登場する時計のイメージは、作中における時間を意味するだけでなく、過去と現在との連続性を担保してもいると考えられる。さらに前作『Der Eisvogel』(2005)に見られる現代資本主義社会への批判というテーマとも比較して、テルカンブの歴史認識についてもあわせて論じたい。

#### 5. ゼロ年代の経済小説 — E=W・ヘンドラーとカトリン・レグラ

植松 なつみ

ゼロ年代のドイツ文学には同時代の問題に向き合い、「今」を捉えようとする動きも登場した。その対象となったのがグローバル化された経済の中で生きる人々であり、「経済」や「労働」が再び文学の主題として脚光を浴びることになった。

本発表では、意欲的な文体実験の点でも注目されるエルンスト＝ヴィルヘルム・ヘンドラーの『Wenn wir sterben』(2002)とカトリン・レグラの『wir schlafen nicht』(2004)を取り上げ、ゼロ年代の「経済小説」が現代人の不安を描き出す手法を考察する。両作品では、グローバル経済に取り込まれた登場人物たちのアイデンティティの不透明さから、グローバル化の波に地域経済が飲み込まれていく姿が明らかになる。また、単なるルポタージュにとどまることなく、身体感覚や身体そのものを喪失していく現代人の不安が顕にされる。ヘンドラーは、登場人物の主体を不明瞭にし、ピリオドや大文字を使用しない文体を混在させ、他者との境界を曖昧にし個の存在を希薄にする。大文字を使用しないレグラも

地の文と会話文の境界を明示せず、接続法を多用して個の存在を隠滅しようとする。こうした手法により、個の存在は一層希薄化し、ニューエコノミー社会に捉えられた人々は「私たち」に統合されていく。また、タイトルの「死ぬ」と「眠る」に見られるように、身体や意識の喪失が強調されている点にも注目したい。

シンポジウム II (10:00~13:00)

B会場 (3454 教室)

### **Zwischen Körper und Unkörperlichem**

司会 : Arne Klawitter / Dieter Trauden / Reiko Tanabe

In den Kulturwissenschaften ist in den vergangenen Jahren das Thema „Körper“ von den verschiedensten Blickwinkeln aus diskutiert worden. Ein Aspekt ist aber bislang nur selten ins Zentrum des Interesses gerückt: das dem Körper entgegengesetzte bzw. ihm komplementäre Unkörperliche. Versucht man dieses vom Begriff des Körpers aus zu definieren (also *ex negativo*), kommen vor allem zwei Gesichtspunkte in Betracht: Versteht man „Körper“ im physikalischen Sinne als etwas, das eine bestimmte Masse und Ausdehnung im Raum hat, so würde das Unkörperliche dadurch bestimmt sein, dass ihm diese Attribute fehlen. Geht man hingegen von einem biologischen Körper-Begriff aus, d.h. „Körper“ als etwas Belebtes, Gefühle und/oder Bewusstsein Besitzendes, dann wäre das Unkörperliche entsprechend das Nichtbelebte. Das widerspricht aber dem traditionellen Verständnis, dass eben das, was den Körper belebt, dem Unkörperlichen zuzurechnen sei.

Rein negative Bestimmungen des Unkörperlichen können also irreführend sein und sind außerdem unzureichend, da sie gerade die Bereiche außer Acht lassen, in denen Körperliches und Unkörperliches sich berühren oder wo die Grenze zwischen beiden nur schwer auszumachen ist. Auf unserem Symposium wollen wir uns kultur- und literaturhistorisch mit solchen „Schnittstellen“ beschäftigen und fragen, wie sich in Diskursen der europäischen Kultur und vor allem in der deutschsprachigen Literatur das Verhältnis von Körperlichem und Unkörperlichem manifestiert. Einen zentralen Ausgangspunkt bildet dabei das Verständnis des Verhältnisses von Leib und Seele in der christlichen Theologie. Dem tritt der Diskurs um mimetisches Verhalten und leibliche Existenz in der Philosophie von der Antike bis zur Neuzeit zur Seite. Ein weiteres Forschungsfeld sind hermetische und alchemistische Traditionen und ihre Rezeption in der Literatur und Ästhetik des 18. Jahrhunderts, insbesondere bei Goethe. In der Dramatik ist das im 18. und 19. Jahrhundert beliebte Schattenspiel ein Bereich,

der – bislang wenig erforscht – das (an den Körper gebundene) Unkörperliche zum Mittel der Darstellung erhebt. Zuletzt kommt auch die Stimmästhetik und ihre Veränderung vom 19. zum 20. Jahrhundert in Betracht, da das Konzept der Entsubjektivierung der Stimme in Opern der Neuen Sachlichkeit die Frage nach dem Zusammenhang von Klang und Körper aufwirft. Über diese in den Referaten behandelten Themen hinaus soll in der Abschlussdiskussion auch auf Phänomene wie das heutzutage zunehmend in den Hintergrund Treten des menschlichen Körpers in seiner natürlichen Erscheinungsform, die Entkörperung und die Abwesenheit des Körperlichen, die Verflüchtigung des Körpers in der Zeit, auf Erscheinungen der (spirituellen) Affektübertragung von einem Körper auf einen anderen, Okkultismus, Magnetismus (Mesmerismus) und Geisterseherei sowie auf die Frage nach dem Ort des Unkörperlichen eingegangen werden.

## **1. Aspekte des Unkörperlichen im christlichen Denken**

Dieter Trauden

Forschungsgegenstand des Referats sind Bibeltex-te und theologische Abhandlungen von der Spätantike bis zur Scholastik (z.B. die Paulusbriefe, die Werke Augustins sowie Thomas von Aquins Schriften). Anhand dieses Materials wird der Frage nachgegangen, wie die „Schnittstelle“ zwischen Leib und Seele, zwischen Körperlichem und Unkörperlichem im christlichen Denken definiert wurde. Das christliche Denken versteht den Menschen als ein aus Seele und Körper bestehendes Wesen, wobei die Seele als unkörperlich und unsterblich gedacht wird. Wie aber die unräumliche Seele sich auf etwas beziehen kann, das unabhängig von ihr räumlich gegeben ist, war ein schwieriges theologisches Problem. Weitere Fragestellungen waren, ob die Seele nach dem Tode körperliche Schmerzen erleiden kann und welche Beschaffenheit der „Auferstehungsleib“ nach der allgemeinen Auferstehung haben wird. Letzteres steht in Zusammenhang mit der scholastischen Diskussion über das Wesen der Engel und der Teufel bzw. Dämonen (= gefallene Engel), nämlich inwieweit diesen Körperlichkeit zugeschrieben werden kann oder nicht. Schließlich kommt die „Transsubstantiation“ während des Messopfers in Betracht, bei der sich Brot und Wein verwandeln, ohne ihr äußeres Erscheinungsbild zu ändern. Die beschriebenen Problemfelder bilden eine wichtige Grundlage für das Verständnis des Unkörperlichen in der europäischen Kultur und stehen stets im Hintergrund der Diskurse über das Unkörperliche in der Neuzeit.

## 2. Mimesis und Leib — Walter Benjamins Theorie der Nachahmung

Dan Morita

Benjamins Überlegungen zur Mimesis – „Über das mimetische Vermögen“ und „Lehre vom Ähnlichen“ (1933) – deren philosophische Bedeutung noch zu entfalten ist, lassen sich erst mit der Frage nach der Priorität der Mimesis von neuem beleuchten. Es geht ihnen nämlich nicht einfach um die Nach-ahmung, sondern um das Ur-vermögen. Im Vortrag soll zunächst das mimetische Vermögen, „ähnlich zu werden“, derart dargelegt werden, dass es aller Erfahrung vorausgeht und sie erst ermöglicht. Dieses ursprüngliche Verhalten, das als Proto-Mimesis bezeichnet werden kann, muss aber von einer Annahme des menschlichen Leibes begleitet werden, der die potentielle Grundlage für das mimetische Verhalten bereitstellt. Hier liegt eine Schwierigkeit vor, da sich diese Art Priorität der theoretischen Auffassung entzieht. Bemerkenswert dabei ist, dass Benjamin den Leib als die „einzige Materie“ für „das älteste Nachmachen“ charakterisiert. Wenn die *prima materia* in der Mimesis zur Form übergeht, so muss dieser Vorgang ausführlich analysiert werden. Man kann erkennen, dass gerade im mimetischen Vorgang die Auswirkung der Zeit eine entscheidende Rolle spielt. Der Vortrag will zu einem erneuerten Verständnis nicht nur von Mimesis, sondern auch von Leib beitragen. Aus einer zeitlichen Perspektive soll er uns eine neue Einsicht auch in das Thema „Zwischen Körper und Unkörperlichem“ verschaffen.

## 3. Das Ästhetische zwischen Feuer und Erde.

### Zur Un/Körperlichkeit des Erdgeistes in Goethes *Faust I*

Yuho Hisayama

Fasst man den Begriff des Ästhetischen in seiner ursprünglichen Bedeutung als eine Sinneswahrnehmung auf, dann erweist sich die Erscheinung des Erdgeistes in der nächtlichen Szene in Goethes *Faust I* durchaus als „ästhetisch“: Ist sie doch von so einer starken Ausstrahlung, dass selbst Faust sie nicht zu ertragen vermag. Daraus resultiert nun die Frage, wie der Erdgeist in Bezug auf seine Un/Körperlichkeit überhaupt zu verstehen ist, denn bei seinem atmosphärischen Erscheinen spielen vor allem Dampf, Licht (vor der Konfrontation mit ihm sagt Faust: „Es dampft! – Es zucken rote Strahlen“, „Es weht / [e]in Schauer vom Gewölb herab“) und nicht zuletzt das Feuer (der Geist erscheint in einer Flamme, und wird von Faust selbst als „Flammenbildung“ bezeichnet) eine zentrale Rolle. Das originäre Wesen dieses Geistes ist jedoch immer noch umstritten. In meinem Referat suche ich, gestützt auf die Ergebnisse der Faust-Forschungen von Rolf Christian Zimmermann und Ulrich Gaier

die These aufzustellen, dass Goethes Erdgeist traditionelle hermetische Vorstellungen des *pneuma* bzw. *spiritus* in sich trägt, die seit der Antike mit den sinnlich wahrnehmbaren Erscheinungen – eben mit Dampf, Licht oder Feuer – verbildlicht und dann in die deutsche Sprache mit dem Geist-Begriff übernommen worden sind.

#### **4. Das Schattenspiel als dramatisches Genre in der deutschen Literatur**

Arne Klawitter

Der Schatten ist für die Untersuchung des Unkörperlichen ein besonders interessantes Phänomen, denn er ist zwar stets an einen Körper gebunden, selbst aber unkörperlich. Literaturwissenschaftlich ist das Schatten-Motiv (insbesondere mit Blick auf Chamisso's Geschichte von Peter Schlemihl) schon oft untersucht worden, weit weniger Aufmerksamkeit hingegen hat die Forschung dem Schattenspiel geschenkt. Dazu wird in diesem Vortrag der Frage nachgegangen, wann, unter welchen Voraussetzungen und mit welchen Präferenzen das Schattenspiel als dramatisches Genre in der deutschen Literatur begründet wurde und welche Werke diesbezüglich eine literaturhistorische Relevanz besitzen. Anhand historischer Texte und Kritiken bzw. Aufführungsbelegen aus Literaturjournalen und Rezensionsorganen wird die in der Forschung bisher weitgehend vernachlässigte Medialität des Schattenspiels untersucht und entsprechend der Aufführungs- bzw. Darstellungstechniken klassifiziert. So kann auf der Grundlage des präsentierten Materials zwischen einem empfindsamen Schattentheater (Jacobi, Michaelis), einem bürgerlichem Privattheater (der Dramatisierung von Bürgers *Lenore*), einem Schattenspiel als Hoftheater (*Schattenspiel Minervens Geburt, Leben und Taten*, aufgeführt zu Goethes 32. Geburtstag in Weimar), einem politisch-satirischen Schattenspiel (Brentano) und schließlich einem romantischen Schattenspiel (Kerner) unterschieden werden.

#### **5. Klang des Unkörperlichen — Die Stimmästhetik der Oper in der Neuen Sachlichkeit, besonders der Opern von Paul Hindemith und Kurt Weill in den 1920er Jahren**

Jin Nakamura

Bei der romantischen Oper funktioniert die Stimme der Sänger als akustisches Zeichen des körperlichen Daseins der Sänger bzw. Charaktere der Oper. Sie hat die Funktion, nicht nur die Texte dem Publikum hörbar zu machen, sondern auch Affekt und Pathos der Charaktere musikalisch auszudrücken. Aber diese Stimmästhetik veränderte sich in den 1920er Jahren, vor allem in den Opern von Paul Hindemith und Kurt Weill. In



diesem Referat sollen zwei Opernwerke, „Der Protagonist“ von Weill und „Cardillac“ von Hindemith unter Berücksichtigung ihrer Stimmbehandlungen, die als Reaktion auf die romantischen Opern angesehen werden können, analysiert werden. Daneben handelt sich es um die Stimmästhetik des damals einflussreichen Musikkritikers Paul Bekker, der behauptete, die Stimme der Sänger solle ihre Funktion, das Geschlecht der Charaktere zu bezeichnen, verlieren und zur ursprünglichen Naturhaftigkeit des Stimmklanges zurückkehren. Sein Aufruf zur Entsubjektivierung der Stimme bezog sich hauptsächlich auf die Stimmbehandlung von Hindemith und Weill. Im Referat wird die Stimmvorstellung der Oper der 1920er Jahre, die von dem Körper der Sänger „unabhängig“ wirken soll, unter Berücksichtigung der Körpervorstellung der Neuen Sachlichkeit – vor allem der der „kalten persona“ (Lehten, 1994) – untersucht, um damit ein Beispiel für das in den Hintergrund Treten des Körperlichen im 20. Jahrhundert zu geben.

口頭発表：文学 1 (10:00～12:35)

D 会場：3353 教室

司会：亀井 伸治，鈴木 克己

1. アイヒェンドルフの『のらくら者の人生から』における  
「子ども」らしさの考察

藤原 美沙

ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフの『のらくら者の人生から』(1826)には、自然に対して心を開くことができる詩人たちと、日々の生活に閉じこもる俗物たちが登場する。これまでの研究において、主人公のらくら者は前者に属し、後者の影響に染まりきることなくさすらい続けると見做されてきた。そして、その要因の一つとして彼の「子ども」らしさが言及されつつも、詳細が明らかにされることはなかった。したがって、本発表では『のらくら者』における「子ども」らしさを、同時代の「子ども」に関する言説と照応させながら分析し、本作に如何なる効果を齎すのかを考察する。

ディーター・リヒターやハンス＝ハイノ・エーヴェルスらによる「子ども」像研究に沿って18世紀以降のドイツ文学における「子ども」像を大別すると、以下の三点を挙げることができる。1. 自然と融和した、無垢で神聖な存在としての「子ども」、2. 近代家族が形成される過程で注目されるようになった、庇護すべき未熟な存在としての「子ども」、3. 大人の世界とは異質な、他者としての「子ども」のイメージである。『のらくら者』の主人公は、1. 自然を賛美し、神に愛されている、2. 洗練された振る舞いができずに失敗をする未熟さがある、3. さすらい辿りつく場所に同化していないことにより、上記の「子ども」

のイメージすべてにあてはめることができる。そしてこのような「子ども」らしさを備えた主人公が、詩人、俗物それぞれと関わりあうことで、詩人／俗物間の二項対立的な関係性は消し去られ、両者が生き生きと描き出されることになる。

## 2. 学知と想像力 — ホフマンの『廃屋』における世界認識のモデルとメスメリズム

土屋 京子

ホフマンの『夜景作品集』(1816/1817) 第二部に収録されている『廃屋』は、目や光学器のモチーフ、命なき対象への偏愛と狂気、ナルシズム、幼少のトラウマ体験など、『砂男』と多くのモチーフを共有している。(Peez 1990, Kremer 1993, Lieb 2002) しかし『廃屋』では、執筆当時にヨーロッパを席捲していたメスメリズムを大きく取り扱い、心の闇を解明する過程に焦点をあて、(Tatar 1978, Barkhoff 1995, 2005) さらに、18, 19 世紀の感覚論や自然科学などの所見を援用し、動物磁気説や共通感覚を独自に発展させている。狂気そのものを描写した『砂男』とは方向性を異にしているのだ。

話の中心となる、カーテンや囲いで外光を閉ざした不気味な「廃屋」は、われわれにとって謎のまま残されている精神世界のメタファーとして解釈できる。(Brüggemann 1989) この廃屋の謎に迫る主人公の直観や想像力は、暗闇に棲息する動物、コウモリやモグラの知覚と深く結びついて表される。ここでモグラやコウモリの知覚は、視覚に匹敵する重要性を付与され、もしくは視覚を含んだ諸々の感覚の基底、共通感覚として位置づけられている。ホフマンは、人間とは全く異なる動物の知覚のモデルを通して、啓蒙の時代に強化された視覚や眼のイメージを超克し、精神世界の深層に到達する、詩人のヴィジョンを示そうとしたのではないだろうか。

## 3. 充填される空白

### — 『晩夏』における「愛」の諸相をめぐる文化史的考察 —

中野 逸雄

『晩夏』(1857) が、アーダルベルト・シュティフターのもっとも重要な作品の一つに数えられることは言を俟たない。とりわけ作品のライトモチーフである「愛」の問題については、シュティフターの自伝的側面との関係も含め作品解釈の方向を規定するアспектの一つとして言及の対象となってきた。

中でも注目されるのは『晩夏』において徹底された、「愛」の描写に対する過度な抑制あるいは理想化の問題である。例えば Jörg Kastner はシュティフターの『習作集』における、描写の過剰な自主規制ともいえる改稿のプロセスに注

目し、「脱人格化される愛」あるいは「無私の愛」といった言葉で、シュティフターの「愛」の描写におけるいわば反ロマン化の傾向を特徴づける。

本発表ではこれら先行研究やそのモチーフにおいて『晩夏』とも深く関連する諸短編との関係も念頭に置きつつ、シュティフターの「愛」の問題の特殊性を作者の理論的著作と『晩夏』の関連を分析することで明らかにする。

この試みによって『晩夏』における「愛」の表現内容は、常にシュティフターが自身で理論的に考察した「美」の規定に制約されているということを確認する。

本発表の狙いはこの確認を通して、『晩夏』の愛の表現に内包される固有の文化的問題、とりわけ、Ulrich Dittmannが『晩夏』との関連で言及した、シュティフターの作品における「観相学」的側面の意味を、シュティフターの自然観、及び人間観に凝縮された創作の方法論に照らし合わせて再定義することにある。

#### 4. ボヘミアの森：シュティフターの作品における〈場所の感覚〉

松岡 幸司

本報告では、シュティフターの短編『森ゆく人』と『みかげ石』の二作品を中心として、彼の作品における〈場所の感覚〉をエコクリティカルに検証する。

〈場所の感覚〉における「場所」とは、自然環境だけではなく、歴史や文化といった人間の営みと結びついた複合空間であり、人間の生を支え、人間が帰属すべき空間となるべき場所である。シュティフターおよび彼の作品にとっての「場所」がボヘミアの森であることには明白である。環境文学研究では、この〈場所の感覚〉を通して、人間と自然の関係や生を再検証するのが現代の優先課題とされている。それゆえ、環境文学作家としてシュティフターおよび彼の作品を研究することで、その今日的な意義を明らかにすることができると言える。

『森ゆく人』では、登場人物の生の道行きが森という「場所」に深く結びついている。その人物から続く生の連鎖は森という場所の特質を表し、森もまた生の連鎖を表象する、という関係性が明らかになる。

『みかげ石』では、祖父から孫への記憶の継承が故郷という「場所」の記憶＝歴史の継承を象徴していることが描かれている。この作品の分析から、人間のアイデンティティともなる「故郷という〈場所の感覚〉」と人間の生との関連を明らかにする。

これらを中心とした考察から、「場所」と人間のアイデンティティの関連を明確にすることにより、人間と環境の関連を明らかにする上で文学的考察が果たす役割の一端を明らかにする。

## 1. ドイツ語との比較から見たアフリカーンス語とオランダ語 におけるアスペクト表現

山藤 顕

本発表では、アスペクト表現のなかでも迂言形による進行形表現を中心に扱う。ドイツ語における進行形表現は使用頻度が低く、単に現在形で表現してしまうことが多い。その一方で、アフリカーンス語やオランダ語では、進行形表現がドイツ語より高い頻度で用いられる傾向にある。アフリカーンス語とオランダ語の進行形表現は3種類あり、ドイツ語ではそれほど顕著ではない構文である姿勢動詞進行形 (afr. *Ek sit en lees.*; nl. *Ik zit te lezen.* 「私は (すわって) 読んでいる」, afr. en (dt. *und*), nl. te (dt. *zu*)) もこの2言語には見られる。アフリカーンス語の姿勢動詞進行形1つにおいても、en (dt. *und*) が不定詞標識として機能している点で、ドイツ語では見られない特徴があることを主張する。

さらに、アフリカーンス語における *besig* (engl. *busy*) *wees* (dt. *sein*) + 不定詞句による構文 (*besig*-構文) において、他のゲルマン語には見られない特徴である、非動作主動詞 (*non-agentive verb*) が不定詞としても現れることができる点を挙げ、アフリカーンス語の *besig*-構文の文法化が他のゲルマン語より進んでいることを主張する。

また、前置詞句進行形に属するアフリカーンス語の {*aan die INF/aan 't INF/aan INF*} + *wees*-構文において、Ponelis (1979) や Donaldson (1993) では指摘されていない、{*aan die INF/aan INF*} + *wees*-構文間で異なる表現をされている例を、ドイツ語 (*am INF+sein*) とオランダ語 (*aan 't /het INF+zijn*) の例を交えて指摘する。

## 2. Die interne Struktur trennbarer Verben

Thomas Groß

Die strukturelle Beschreibung trennbarer Verben führt zu erheblichen Problemen in vielen Theorien. Müller (2003) bspw. zeigt, dass trennbare Verben Klammerparadoxe verursachen. So muss der Infinitiv von *aufhören* entweder als [*auf*]+[*hör-en*] oder als [*auf-hör*]+[*-en*] aufgefasst werden. Die erste Analyse ist problematisch, weil sie die bedeutungstragenden Bestandteile des trennbaren Verbs, nämlich *auf* und *hör*, nicht unmittelbar zusammenfasst und somit die Bedeutungskomposition nicht erklären kann. Die zweite Analyse verursacht Probleme, wenn, wie bei der Partizipbildung, Morpheme zwischen die Bestandteile des trennbaren Verbs treten. Die im Vortrag

gemachte These lautet, dass sich solche Klammerparadoxe nur dann ergeben, wenn man eine Konstituentengrammatik verwendet, und dass eine Dependenzgrammatik die Struktur (auch morphologisch komplexer) trennbarer Verben problemlos erfassen kann. Der Vortrag stützt sich dabei auf Arbeiten von Groß und Osborne (2009) und Osborne und Groß (2012). Deren Ansatz sieht nicht die Konstituente, sondern die Katena (lat. *Kette*, Pl. *Katenae*) als grundlegende strukturelle Einheit.

Groß, Thomas and Timothy Osborne. 2009. Toward a practical dependency grammar theory of discontinuities. *SKY Journal of Linguistics* 22. 43-90.

Müller, Stefan. 2003. The morphology of German particle verbs: Solving the bracketing paradox. *Journal of Linguistics* 39(2). 275-325.

Osborne, Timothy and Thomas Groß. 2012. Constructions are Catenae: Construction Grammar meets dependency grammar. *Cognitive Linguistics* 23, 1: 163-214.)

[http://de.wikipedia.org/wiki/Katena\\_%28Linguistik%29](http://de.wikipedia.org/wiki/Katena_%28Linguistik%29)

### 3. 句例パラレルコーパス構築とその諸問題

阿部 一哉  
在間 進

「句例」は、例えば Fußball spielen「サッカーをする」、die Befreiung der Geiseln durch die Polizei「警察による人質の解放」のような、語より大きく文より小さい単位である。なお、本研究では当面、動詞句を研究対象とする。

紙媒体の和独辞書では、紙数の関係で「ドイツ語を書く」ために本来的に必要とされる量の句例・文例を記載することは不可能である。しかし IT 技術を用いたオンライン方式ではそれが可能である。

そこで私たちは、ドイツ語文を書くという目的を視野に入れた句例パラレルコーパスの構築を行なっている。文例より句例に重点を置くのは、句例の方が収集が容易であるという技術的な問題のためだけではなく、句例は、文の基本的部分を構成していると仮定できるからである。なお、「句例」の厳密な定義は当面、行なわず、実証的な作業を積み重ねることに集中する。

オンライン対訳データベースの実用事例としては広島大学のパラレルコーパス DJPD が挙げられるが、収録されている事例数は決して十分でない。ドイツでの大規模コーパスを用いたコロケーション研究もいくつか公開されているが、これらをそのままパラレル化すれば、句例パラレルコーパスが完成するわけでもない。

本発表では、日本語の活用辞典などに基づくデータ収集、形態素解析技術を援用した日常的な言語表現による検索方法、XML 技術・フォクソノミー的手法を取り入れたデータ設計という具体的な手法を示しつつ、句例パラレルコーパスの構築について述べる。

ブース発表(11:30~13:00)

F 会場(3201 教室)

### ドイツ語の授業導入部における「発声練習」：数字や身近な語句による発音と綴りの練習

三澤 真

本発表では、ドイツ語の授業の導入部において毎回、数字などの基礎的な語彙をテンポよく教室全体で声を合わせて発音する実践活動について報告する。この帯活動の目的は発音・語彙・綴りの規則を習得することであり、ドイツ語を発音することへの心理的な抵抗感をやわらげることでもある。

それまで発表者は綴りと発音に十分な練習時間がとれず、会話重視の授業においても発音の機会を多く設けることに困難を感じていた。

そこで「発声練習」として全員で起立し、声をそろえて数字を発音する一種の準備運動を行うことにした。この活動では話速とリズム感を重視したテンポと切れ目を設定し、綴りをスライドで提示している。また音の融合についても頻繁に言及し、積極的に練習している。発音した語彙をノートに書き、綴りの定着度を自己評価する活動も行っている。

数詞は基礎的な語彙でありながら、綴りの規則の多くを含んでいる。実際の授業では数字の桁数を増やす、序数を日付で使用する、曜日や月名を使うなど、段階的に難易度を上げている。

この実践により授業中のページ指示もドイツ語で行えるようになり、買い物や時刻などの単元もスムーズに進んだ。

本発表ではデモンストレーションと説明を行うが、この練習方法の利点や問題点、改善点について広く意見交換を行いたいと考えている。

ポスター発表(13:00~14:30)

G 会場(3202 教室)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

### 表現舞踊に見るコスチュームとマスクの役割

— メアリー・ウィグマンの舞踊詩を中心に —

照井 夕可里

メアリー・ウィグマン(1886-1973)は、舞踊に独立性を与えたラーバンと二種の舞踊の融合を図ったヨースの間に位置する表現舞踊家である。同時にそれは、彼女が舞踊の転換を試みたと解釈できる。舞踊の変容は、19世紀後半から20世紀前半にかけて起こった芸術運動と関係する。ドイツでは、表現主義運動に

において芸術と舞踊が接近し、表現舞踊の誕生を導いた。

ウィグマンは、舞踊に対し「物事に関する知識が不要となり、自らの体験のみが法則としてよりどころとなるとき、そこに初めて舞踊が生まれる」と認識を示した。つまり、彼女は自身の体験と感情を舞踊作品に反映し、舞踊に論理的な追求から内面的な追求を意味づけたのである。

ウィグマン以前の舞踊は、様々な法則を持つ舞踊が主流で、既存の様式美に焦点が当てられたが、ウィグマンは舞踊を通じて身体の解放を行い、新しい舞踊観をもたらした。それは、女性の立場にも変化を生じさせ、社会的な抑圧から自己の発揮へと革命的な役割を果たした。これは、舞踊作品が美的感情を誘発する客観的構造を探る内容から、創作の自由性に傾斜したことを暗示する。

彼女の作品には共通して、コスチュームとマスクが登場するが、それらの特徴として非西欧性が挙げられる。コスチュームとマスクの非西欧性は、「身体言語」として魂を伝える媒体であると共に、魂そのものとして扱われている。

本発表では、ウィグマンの創作の自由性を手がかりに、彼女の自伝や舞踊詩から彼女の舞踊観を検討し、舞踊作品における主観的感情の包含とコスチュームとマスクの導入の関連性について論証したい。

シンポジウム III (14:30~17:30)

A 会場 (3114 教室)

文学史・文化史からみたトーマス・クリング

**Thomas Kling im Kontext der Literatur- und Kulturgeschichte**

司会： 縄田 雄二

“In den Nachrufen auf Thomas Kling ist vom ‘ausgezeichneten Lyriker’ die Rede, vom ‘Ausnahme-Lyriker’ und vom ‘zweifellos bedeutendsten Dichter seiner Generation’. Gewiß. Wir werden noch eine Weile brauchen, bis wir begreifen: Der Verlust dieses Dichters ist nur mit jenem zu vergleichen, den der Tod Paul Celans bedeutet hat, mit 49, zwei Jahre älter als nun Thomas Kling. Die Bibliothek, die brennt.“ (Marcel Beyer: “Die Bilder Denken”, in: Frankfurter Allgemeine Sonntagszeitung, 10.04.2005.)

So schließt der Schriftsteller Marcel Beyer seinen Nachruf auf Thomas Kling (1957-2005) ab und würdigt damit Klings Werk, das noch vielfach auf eine kritische Aufarbeitung wartet.

Seit dem Tod Klings wird seine singuläre Stellung in der Geschichte der deutschen Lyrik, ja der deutschen Literatur der letzten Jahrzehnte immer deutlicher. Während dem mit vielen Preisen ausgezeichneten Dichter zu seinen Lebzeiten eine Ausgabe von “Text und Kritik” gewidmet wurde, erschienen posthum nicht nur eine Gesamtausgabe, sondern eine Auswahl seiner Gedichte als Reclam-Taschenbuch.

Um so mehr verwundert es, dass ein Dichter von solcher Größe von Germanisten in Japan kaum rezipiert worden zu sein scheint. Das Symposium soll dazu dienen, diesen Missstand abzuschaffen. Dabei handelt es sich jedoch nicht darum, ein einfaches Porträt des Dichters zu erstellen. Es geht vielmehr darum, Klings vielseitiges Werk, deutschsprachige Forschungen berücksichtigend, aus unterschiedlichen Perspektiven z. B. der Literaturgeschichte, der Mediengeschichte, des kulturellen Gedächtnisses oder der Komparatistik zu erhellen.

Drei Referate werden bewusst auf Japanisch gehalten. Wir hoffen, dass aus dem Symposium ein Band für die Studienreihe der JGG entsteht, damit in diesem Rahmen endlich japanischsprachige Aufsätze zu Kling erscheinen werden. Zwei Referate sollen jedoch auf Deutsch gehalten werden, nicht nur wegen der Muttersprache der Vortragenden, sondern auch deshalb, weil in einem der Vorträge Klings deutschsprachige Haikus behandelt werden. Mit einer Analyse der Japan-Bezüge Klings soll auch die deutschsprachige Kling-Forschung von Japan aus bereichert werden.

## 1. トーマス・クリングの中世への視線

### — „*wolkenstein. mobilisierung*“を巡って

山本 潤

トーマス・クリングは作品素材の多くをヨーロッパの文化史に取材し、現代の詩人としての視点から過去の見直しを試みていた。そうした活動の一つが、中世後期の詩人、オスヴァルト・フォン・ヴォルケンシュタイン（以下 OvW）への取り組みである。

OvW は、1376 年に生まれ 1445 年に没した南チロル出身の詩人であるが、この時代の詩人としては例外的に、詳細な伝記的情報が伝わっている。また彼は自分の詩を収録する写本を制作させており、当時としては稀有な、己の作品を「記録し伝承させること」に自覚的な詩人であった。クリングによる OvW の詩の翻訳と彼の伝記的事項を踏まえた自身の手による詩を組み合わせた作品、*„wolkenstein. mobilisierung“* の冒頭には、各地を旅して経験を積み、年老い、そして現在は獄中にある OvW の独白が、「登場人物/話者」のものとして据えられている。これは作品全体の枠を形作っており、「登場人物/話者」は聴衆を前にパフォーマンスを行うものであると同時に、OvW 自身として演出される。クリングは「登場人物」である OvW の伝記的事象を背景および語りの対象としながらも、それを現代的な語彙を用いる「話者」に語らせており、そこには「登場人物/話者」の関係と「中世/現代」を重ね合わせる効果が認められる。本発表は、同作品に見えるクリングの OvW および中世という時代への視線の一端を明らかにすることを試みる。



## 2. トーマス・クリングの連作詩「魔女」

### — 裁判のメディア史の観点から

林 志津江

この発表では、クリングの連作詩「魔女たち」(*Die Hexen*)を例に、クリングが主要な文化論的テーマとしてのメディア論をいかに自身の詩作へと昇華させたかを考察することで、彼の多彩な詩作の様相を浮かび上がらせてみたい。

「魔女たち」は、中世ないし近世初期の魔女裁判をテーマにした三つの詩から構成され、メディア論、とりわけ口頭語性と書記性の関連、図像と言葉、裁判のメディアといったテーマが読み取れる。詩の舞台である魔女裁判の法廷は、語られる言葉の口頭語性と、それを書記が書きとる文書の書記性との対比で構成されているかのようだ。この対比は W. J. オングの『声の文化と文字の文化』の主題に他ならない。また連作中 2 番目の詩「バルドゥング、別名グリーン、魔女」(*Baldung gen Grien, Die Hexen*) は、画家ハンス・バルドゥングの色彩木版画『魔女たち』(*Die Hexen*, 1508) を題材にしている。詩は印刷技術というメディア・テクノロジーの観点から解釈できる一方で、図像と言葉との関係、ないし絵画の描写と絵に描かれた光景を法廷で証言するという二層の対決として読むこともでき、裁判・法律と文書メディアとの強い関連性を論じるコーネリア・ヴィスマン (Cornelia Vismann, 1961-2010) の研究も参照できればと考えている。

## 3. 墓碑としての現代詩 — „*Die Aufnahme Mai 1914*“

川島建太郎

クリングの詩 *Die Aufnahme Mai 1914* は、モットー・エピグラム・図像の 3 要素からなるある種のエンブレムとして読むことができる。バロック時代に隆盛した伝統的なエンブレムでは、エピグラムが図像の謎を解き明かす役割を果たす。それに対してクリングのエンブレムでは、エピグラムが図像を解説することなく、かえって全体の複雑さを増加させ、謎を深める役割を果たす。なぜなら、モットーとエピグラムが 1914 年 5 月に撮影された詩人トラークルの写真を対象としているにもかかわらず、モンタージュされた 6 枚の一連の写真はトラークルではなく、当時の海軍を被写体としているのである。この詩のモットーとエピグラムはつまり、モンタージュされていない別の写真へのコメントである。*Die Aufnahme Mai 1914* を構成する戦争写真と墓碑銘としてのテキストは、両メディアがそれぞれのメディア性において指し示す死という概念以外には、意味論上の噛み合いが全く存在しない。バロックのエンブレムや現代マスメディアにおける図像とテキストの関係と正反対に、写真とテキストが意味論上、

齟齬をおこすことにより, *Die Aufnahme Mai 1914* は撮影から半年後に自ら命を絶った詩人トラークルを想起するための「秘教的」な墓碑となるのである。

#### **4. Thomas Kling und die Wiener Avantgarde**

Walter Ruprechter

Thomas Kling ist ein Dichter mit starkem Traditionsbewusstsein. Was jedoch nicht heißt, dass er traditionell oder konventionell dichtet, sondern – im Gegenteil –, dass er Traditionen erforscht, um eine zeitgerechte Ausgangsbasis für ein neues Sprechen im Gedicht zu finden. So reflektiert er poetische Sprechweisen von der Antike über das Mittelalter und barocke Traditionen bis zur Avantgarde des frühen 20. Jahrhunderts und bis heute, um sich seines Standorts in der Literaturgeschichte zu vergewissern. Eine solche Stationenbeschreibung seiner „Ahnenstrecke“ hat er in den Bänden „Itinerar“ (1997) und „Botenstoffe“ (2001) vorgelegt, worin er sich eine Tradition für sein eigenes Schreiben konstruiert. Parallel dazu hat er sich einen persönlichen Kanon von „Gedichten auf deutsch“ vom Mittelalter bis zur Gegenwart angelegt, den er in dem Band „Sprachspeicher“ (2001) veröffentlicht hat. Beides zeigt sein Bemühen, sich mit seinem Dichten historisch zu verorten und das Gedicht keinem beliebigen Subjektivismus auszusetzen.

In dieser historischen Verortung spielt auch die Wiener Avantgarde der 50er bis 70er Jahre eine wichtige Rolle. Das Itinerar lässt Kling sogar mit seinen Wiener Erfahrungen Anfang der 80er Jahre beginnen. Mein Referat beschäftigt sich damit, die Spuren der Wiener Avantgarde, zu der neben der Wiener Gruppe auch Ernst Jandl, Friedericke Mayröcker, Reinhard Priessnitz sowie der Wiener Aktionismus zählen, in Thomas Klings Poetik und Poesie, aber auch in seiner Vortragsweise aufzuzeigen.

#### **5. Die deutsche Haiku-Dichtung und Thomas Kling**

Stefan Buchenberger

Die als oft urjapanisch angesehene Gedichtform des Haikus, mit ihrem starren 5 – 7 – 5 Silbenschema und dem erforderlichen Jahreszeitenwort (kigo) hat viele westliche Dichter fasziniert und inspiriert. Genannt seien hier nur Ezra Pound, Rabindranath Tagore, der Haiku auf Bengali verfasste, oder Octavio Paz, der Bashos *oku no hosomichi* ins Spanische übersetzte. Die Popularität des Haikus ist auch im 21. Jhd. ungebrochen mit internationalen Haiku-Vereinigungen und Festivals, die eine regelrechte globale Haiku-Szene bilden.

Auch in Deutschland und den deutschsprachigen Gebieten gibt es eine starke Tradition

der Haiku-Dichtung, die 1920 mit Rainer Maria Rilke begann und sich mit Autoren wie Günter Eich, Paul Celan oder H.C. Artmann, bis zu Durs Grünbein, der seine Japanreisen in Form von Haiku-Reisetagebüchern festhält, fortgesetzt hat. Teil dieser Tradition sind auch die zahlreichen deutschen Haiku-Übersetzungen, wie z.B. durch Dietrich Krusche, der auch selber Haiku verfasst hat, oder Jan Ulenbrook, um nur einige zu nennen.

Thomas Kling selbst hat zwar nur wenige Haiku verfasst, aber, wie bereits in den vorhergehenden Vorträgen des Symposiums thematisiert, hat er auch in diesem Bereich eine Ausnahmestellung inne. Auffallend bei seinen Haiku sind, wie auch in seinen anderen Texten, die extreme Komplexität und Vielschichtigkeit seiner Haiku, in denen er mühelos die verschiedensten semantischen Bereiche miteinander verbindet und damit eine eigenständige Form dieses Gedichttypus erschafft.

Ziel dieses Vortrags ist es, nach einem kurzen Überblick über die internationale und deutsche Haiku-Dichtung, die Texte Klings vorzustellen zu analysieren und mit anderen Werken deutscher Haiku-Dichter, hier ist in erster Linie an Durs Grünbein gedacht, zu vergleichen. Hierbei soll v.a. der Frage nachgegangen werden, worin Klings Ausnahmestellung auch im Bereich des deutschen Haiku begründet liegt, um so auch diesem Teil des Werkes von Kling die angemessene Würdigung zukommen zu lassen.

シンポジウム IV (14:30~17:30)

B 会場 (3454 教室)

**H.v.クライストの戯曲を読み直す**

**Relektüre kleistscher Dramen**

司会：高本 教之

昨年 2011 年は H.v.クライスト (1777-1811) の没後 200 年であった。ドイツでは昨年までさまざまな催しが劇場や出版界において繰り広げられてきた。1988 年からはじまる Roland Reuß/Peter Staengle によるブランデンブルク (のちのベルリン) 版新全集が 2010 年に三巻本のミュンヘン版としてまとめられたほか、2007 年の Gerhard Schulz, Jens Bisky 以降じつに 7 種におよぶ大部の評伝本が刊行された。前者は校閲批判を通してクライストのテキストを、後者はそれぞれ異なる視点からクライストの生涯を「見直す」(Revision) 試みと評価することができる。そのほかドイツ語圏内外の研究史を網羅した Kleist-Handbuch (2009) の刊行に加え、単著やアンソロジーの形での研究書は続々と発表されている。本シンポジウムはそうした成果を踏まえつつ、没後 200 年を経たいま

クライストの戯曲の読み直しをはかるものである。5名の発表者が4種の戯曲を取り上げる。

第一発表者の由比は、処女作『シュロップフェンシュタイン一族』を取り上げ、相対立する二組が形作るシンメトリーの構造、不信と誤認により出来る悲劇的結末という、その後の作品群に引き継がれるモチーフの萌芽的相貌を浮き彫りにする。

第二発表者の眞鍋は、『アンフィトリュオン』において、表現形式やモチーフとして多層にわたる過剰な「反復の技法」が見いだされる点を指摘し、その意味を明らかにする。

第三発表者の高本は、『ハイルブロンンのケートヒェン』におけるセリフとト書きのほか、場面転換と小道具に着目し、その「見せ方・書き方」の独自性を解き明かす。

第四発表者の新本と第五発表者の猪股は、ともに『ペンテジレーア』を取り上げる。新本はこの戯曲の「翻訳」稿において再現不可能となる性差と戦争の表象をめぐるクライストのレトリックを分析する。猪股は、この戯曲の執筆にあたって作者が参照したであろう「翻訳」がいかなる影響をそのテキストに及ぼしているか、文体レベルの分析を通して論ずる。二つの発表は、作品の成立「以後」と「以前」という双方向からこの戯曲を挟み撃ちにし、そのテキストの独自性を浮き彫りにする。

続くディスカッションにおいて相互に批評を交わし、クライストの戯曲の問題圏を提示する。クライストのテキストは、その表現形式と内容のいずれにおいても複数の問題を抱え、異なる意味世界を同時に現出せしめている。それは一義的読解に抗うような身振りで、しかし、それゆえにいつそう強く解釈を求めている。そして解釈にあたっては多角的・複眼的なアプローチを要求するものである。このシンポジウムはまさにそうした要請にこたえることを企図する。クライストの戯曲をめぐる複数の視点・論点が交差する場を作り、交差によって張り巡らされる網の目に中に現在のクライスト像を提示することを目指す。

## 1. 「節度も秩序も知らぬ心の動き」

### — 『シュロップフェンシュタイン一族』における「自然」

由比 俊行

クライストの処女戯曲『シュロップフェンシュタイン一族』(1803)は、一族の二つの分家の確執を背景に、相互不信と事実誤認の連鎖のなかで、恋に落ちた両家の子供たちが辿る破滅的な運命を描く悲劇である。この作品については、従来、その際立った形式性が注目されてきた。すなわち、作品世界は、両家の家族構成からそこで生じる出来事の連鎖に至るまで、厳密なシンメトリー構造

を備えているのである。創作活動を開始するにあたって、クライストはなぜこれほどにあからさまな形式性を必要としたのか。

この問題を考察するために、本発表では、限なく構造化された「家」の領域と並ぶもうひとつの領域、両家の間に位置する「自然」の領域に着目し、不信と誤認の悲劇の、「自然」の側からの読解を試みる。恋人たちが互いの信頼を確認し合う「自然」の領域は、一見するとルソー的・牧歌的なユートピア空間であるかに見えるが、そこは同時に、作中人物の死と破壊に直結する両義性を帯びている。クライストが手紙のなかで展開した「自然」にかんする思考を参照しつつ、作品の形式を、無定形で両義的な「自然」の作用を象る仕組みとして提示したい。

## 2. 反復される「反復の苦悩（アンフィトリュオン）」の形式性

### — 『アンフィトリュオン モリエールに倣いたる喜劇』を 読み直す

眞鍋 正紀

本発表はH・v・クライストの戯曲『アンフィトリュオン』(1807)を取り上げ、そこで過度に繰り返される「反復の技法」に注目して同作の形式性と意味内容の絡み合いを整理する。そのさいN・ルーマンの社会記述の道具立てを援用して同作を解説した Karin Ockert の提案に依拠しつつ、同作の内容が社会の構造変化といかに結びついているか検討したい。この戯曲には豊韻法と頭語反復が頻出する。「前部（表面）が反復され（後部=中身は変化する）」というこの特徴は、まずは修辞として台詞の中で増殖して読み手の意識を音響の次元で揺さぶり、やがて視覚次元の書字処理(頭文字 A→J)の攪乱として筋の上でも顕在化する。さらにこの特徴は、夫（人間）が姿の等しい別人（神）に入れ替わる二組の夫婦の登場の反復として場面転換の構造にも見いだされ、終いには戯曲全体の意味と価値付けすら「反復」の隠喩に組み込まれている、と意識させる。本作は、個人としての「人間」が経験する至福と苦悩を「神」が経験するそれと織りなして見せているが、その苦悩は貞淑な妻が抱く姦通の疑い・貞操の危機という既存の喜劇モチーフとは異質な、機能分化した複数のサブシステムにまたがって生きるしかない個人の、すぐれて近代的な「苦悩」だ。前近代的な神話を踏襲しつつ「苦悩を反復すること（アンフィトリュオン）」によって、それはヒキゲキ（非／悲-喜劇）的に再創造される。

### 3. クライスト流「騎士劇」が見せるもの

#### — 『ハイルブロンンのケートヒェン』を読み直す

高本 教之

「騎士劇」、「恋愛劇」、「メールヒェン」の要素が絡み合う『ハイルブロンンのケートヒェン』において、その異質なパーツを作者はいかに接合させ、何をみせているか？ 本発表はその「見せ方」の独自性を追う。冒頭「秘密裁判」の「覆面」と「目隠し」という小道具からして、この戯曲が「見ること」をめぐる仕掛けに満ちていることを暗示している。天使の登場、クニグンデの正体など、登場人物にとって不可視・不可知なものが、観客に対し、あるときは一瞬のうちに、またあるときは事前・事後の報告として可視化される。その「見せ方」の極端さは、クライストの他の戯曲や散文作品と比較しても顕著である。クライストの散文の言葉の独自性に着眼した B・タイゼンや K・イエツィオルコフスキの研究は、アナグラムやダッシュなどの物言わぬ記号の配置が、作者の意図か否か判別しつくせないままにテキストの表面に存在し、それゆえテキスト自体が読者に解釈を要求してやまないという事態を指摘した。この戯曲のうちにはそうしたテキストの特性のいわば原型がみとめられる。H. v. K (Heinrich von Kleist) による K. v. H (Käthchen von Heilbronn) における、前の「場」を受けない場面転換、出来事とその報告の時間のズレ、そして *deus ex machina* の登場は、散文におけるダッシュのように修辞学用語でいう頓絶法と同様の効果を持つ。本発表では、そうした点に着目し、この戯曲の「見せ方」(「書き方」)の独自性を明らかにすることを目指す。

### 4. 『ペンテジレーア』における〈戦争〉の表象

#### — 比較翻訳読解の試み

新本 史斉

ホメロスの『イリアス』が戯曲『ペンテジレーア』のメタテキストとなっていること、とりわけそこでの①「主体としての男性、客体としての女性」という二項対立的論理、②「死者の殺害」とも呼ぶべき屍体凌辱行為をめぐる、クライストの詩的想像力が類例のない展開を見せていることは、クライスト研究において繰り返し論じられてきた。しかし、この詩的想像力が現実にテキスト上において展開するにあたって、三つのジェンダーを有するドイツ語特有の言語システムが重要な役割を果たしている事実は、これまで論じられることはおろか指摘されることすらなかった。①の論理を反転させ、さらには機能不全に陥れてゆくプロセスにおいて、また②の行為を表象可能性の限界にまで過激化させてゆくプロセスにおいて、テキスト上では「男性／女性／中性」名詞の

差異を効果的に用いた演出がおこなわれているのだが、それは文法上の所与と見なされるばかりで主題化されることはなかったのである。本発表では、まず英、仏、日本語訳『ペンテジレーア』をドイツ語原文の周囲に配置することによって、性差に関わるクライストのレトリックをドイツ語の言語システムと密接に結びつけた「翻訳不可能なもの」として可視化し、さらには、言語システム上の制約とは無関係であるにもかかわらず、諸訳においてははまだ再演が試みられていない、＜戦争＞の表象をめぐる、クライスト固有の、両義性を抱えこんだレトリックを分析する。

## 5. クライスト『ペンテジレーア』

### — 使者の報告とテイコスピア 過去と現在 —

猪股 正廣

『ペンテジレーア』をギリシャ悲劇の系譜に近づけているものはホメロスの叙事詩やギリシャ神話との内容上の関連にとどまらない。ギリシャ悲劇において舞台と神話的背景とをつなぐ技法とされる使者の報告 *Botenbericht* 及びその一変形ともいえるテイコスピア（ドイツ語の *Mauerschau*）と思われる個所が『ペンテジレーア』の中に何度も現れることから、クライストがギリシャ悲劇を読んでいたことがうかがわれる。では当時この作家には原文以外にどんな翻訳のギリシャ悲劇が入手可能だったのだろうか。またそれらの翻訳では、この使者の報告に使われる動詞の時制にどのような異同があったのだろうか。

使者の報告は、本来、起きてしまった過去の出来事を告げるものであるので、動詞の時制は過去を示すものが基本であるはずであるが、『ペンテジレーア』では使者の報告とみなせる箇所であっても現在形の動詞が使われる比率が非常に高い。そこから、舞台の外の情景を同時進行で語るテイコスピアとの近接が生じ、きわめて迫真的な描写が連続することになる。

参照すべきギリシャ悲劇の翻訳作品はブリュモアの『ギリシャ演劇』をはじめとして、ヴィーラント訳『ヘレナ』あるいはシラー訳『フェードラ』に至るまで多岐にわたると思われるが、それらを最初からあまり限定せず、むしろ解釈可能性の領域を広げるための問題提起としたい。

## 語彙実用論の試み

## Lexikalische Pragmatik

司会：森 芳樹

möglich と unmöglich は対立しているように見えるのに、たとえば Möglichkeit と名詞化した際に前者だけでなく後者も含むのは一般化が起こっているからだ。これを無標化と呼ぼう。逆に Jacobson(1971)に倣えば、Esel はロバ一般を指すが Eselin と対立させられると、雄ロバを指すことになる。これを特定化と呼ぶことにする。従来の記号論の枠内では記号の扱いの問題となるが、これは意味論的には概念形成の問題に他ならない。本企画では、放出動詞、瞬間把握語彙、法助動詞、アスペクト・時制及び副詞といった現象を取り上げながら、まず第一に「多義性」(Ambiguität, Polysemie) を語彙的に分析していきたい。一方では、概して容易に統語や談話で解消されると主張される現象が本当に解消されるのかを点検していきたいからだ。他方では統語や談話の一般的な道具立てが少なくとも現象の整理には不可欠であることを示すためでもある。

この問題はすぐれて辞書的な問題でもある。辞書項目としては対等であっても、語彙項目として「多義」を構成するか、一般推論の結果として辞書項目を構成しているか理論的には区別されることになる。後者については (können の許可読みなど) 個別事例についての考察はあっても、その語彙理論内での位置づけに関する考察は一般会話含意の研究 (Atlas & Levinson 1981, Horn 1989, Levinson 2000) を除けばないに等しい。

次に、多義性を示す語彙項目における意義選択を左右するコンテキストの条件を探る。この「語義選択のメカニズム」の問題意識はミニマリストなどには欠けている視点で、意味論・実用論を問題にするからこそあぶり出されてくる問題だといえる。

さらに、「多義性」を Ambiguität と取るにしても Polysemie と取るにしても、構成的意味論を捨て去らないならば、語義選択のメカニズムと統語のメカニズムの相関関係を問わないわけにはいかない。そして統語計算にコンテキストの定位や実用論的計算が含まれるとしたら、それはどのように行われるのであろうか (Carston 2002, Chierchia 2004)。この「統語計算と語義選択の関係」の問題については、二つの立場が考えられる。一つは構成的意味論の枠内で合成の自由度を増す考え方で、タイプ制約とタイプ強制 (coersion) の研究がこれに含まれる (Pustejovsky 1995, Asher 2011)。これに加えて本企画で新たに提案したいのは、談話モダリティに誘引された語義選択の可能性である。この両者はボトムアップとトップダウンの関係にあると考えられ、両者の関係を探ることも本



企画の課題の一つである。

最後に、本企画が問題にするこれらの課題はまだ記述的な議論のレベルにあることは否めないが、本企画では語彙意味論、機能言語学、認知意味論、形式意味論といった異なる立場からの提案が予想され、シンポジウムにおける議論を賑わせることとなろう。さらに文法化研究、言語変遷研究との接点もあると思われるので、シンポジウムにおける活発な議論をよろしく願います。

## 1. 動詞の語彙情報と可変的振舞い：放出動詞の分析から

高橋 亮介

本発表では「放出動詞」と呼ばれる動詞類を分析対象とし、この動詞類が示す多様な文法的振舞いの検討を通じて、動詞の語彙情報と名詞の意味特徴や構文、文脈といった言語的ないし非言語的な諸要因とがどのように関わり合うのかについて考察する。

音や光、臭いなどの放出を表わす *knarren*, *brennen*, *duften* などの放出動詞は、1項動詞として用いられるのとは別に虚辞 *es* を伴う非人称構文においても生起可能である一方、原則として非人称受動の形成を許容せず、その点において、やはり1項動詞で非人称受動の形成を許容する *schreien*, *schwitzen*, *weinen* などの活動動詞とは著しい対比をなす。もっとも、放出動詞と活動動詞との区別は必ずしも明確ではなく、音声の放出を表わす一部の動詞は主語名詞が有生であるか否かに応じて、非人称構文と非人称受動のいずれにおいても生起するという両義的な性格を示す他、活動動詞の一部も文脈的な支えがある場合に非人称構文における生起が可能となる場合がある。

上記の例のみならず、共起する名詞の意味特徴や文脈に即した放出動詞の可変的な振舞いは、前置詞句を伴う移動構文を含めた他の統語環境においても認められる。本発表では、そうした諸現象の観察と分析を通じて、ある動詞が示す文法的振舞いをどの程度までその動詞の語彙情報に帰するのが妥当であるかという問題に関して見極めを試みる。

## 2. 「実用論的意味」の派生：ケーススタディ「アスペクト」

田中 慎

本発表では、完了相を表すアスペクト表現が、しばしばその副産物として、話し手にとって「よいこと」という含意を持つという言語横断的に観察される現象を扱う。これを通して、これらの「含意」が、純粹に個別的現象なのか、言語一般に構造から言わば必然的に派生されてくるものなのかということについての論考を進める。

本発表は、関口（1962）で「単回遂行相動作」と呼ばれる現象が、特定の「副次的意味」を持つという観察から出発する。例えば：

観察 1：英語の have a + V 表現は、(a)未完了の動詞を完了の表現に変えること、(b)比較的短い時間の出来事の描写をおこなうこと、(c)この表現の表す事態が動作主にとって好ましいものであること、などが指摘されている(Wierzbicka 1982)。

(1) have a look, have a drink, have a lay down ...

観察 2：ドイツ語の普遍化詞 mal による表現は、(a)未完了の動詞と用いられる傾向にあること、(b)比較的短い時間の出来事を表すこと、(c)聞き手にとって望ましい事態を促すために用いられること、などのような特徴を持っている。(cf. 筒井 2010)

(2) Schau dir mal diese Akte an.

本発表では、これらの現象の背後に共通してある原理を探りながら、実用論的に生じる「多義の構造」というべきものを明らかにしてみたい。

関口存男(1961): 冠詞. 第二巻. 東京: 三修社.

筒井友弥(2010): 「心態詞 mal の意味について」『エネルギー』第 35 号. 21-36.

Wierzbicka, Anna (1982): WHY CAN YOU HAVE A DRINK WHEN YOU CAN'T \*HAVE AN EAT? In: Language 58/4. 753-799.

### 3. 助動詞の意味機能：伝聞と推量について

板倉 歌

話法の助動詞を一つ選び、辞書でその意味を引くと様々な意味が羅列されているが、それらの意味は必ずしもそれぞれ完全に独立しているわけではなく、現実の文脈では意味の決定に曖昧さの残る場合がある。そこで本発表ではコーパスを用いることでそのような例を抽出し、どのような場合にどの意味で理解されるか、意味を記述的に探り、意味地図(semantic map)の作成を目指す。特に、伝聞・引用と推量を意味する話法の助動詞を取り上げ、それぞれ意味の使い分けとその条件を明らかにする。話法の助動詞の意味については一般的に義務的用法と認知的用法の大別が認められているが、近年証拠性の観点からの研究も盛んになっている。しかしこの証拠性の分野は、文法化が関わっているもののどの程度をもって証拠マーカと認めるかという点からして現在議論がなされているところであり(Aikhenvald: 2004 [2009], Diewald/Smirnova: 2010), また引用と証拠性の関係についても、引用は証拠マーカに含まれるという説とそれに異を唱える説があるなど、まさに研究途上の分野である。そこで、本発表ではコーパスを利用した実証的な分析をもとに、この観点からの研究に検証を加え、その上で、新たな意味地図の作成を図る。

Aikhenvald, Alexandra Y. (2004 [2009]): Evidentiality. New York: Oxford University Press.

Diewald, Gabriele/ Smirnova, Elena (2010): Evidentiality in German. Linguistic realization and regularities in grammaticalization. Berlin/ New York: De Gruyter Mouton.

#### 4. 意味強制におけるモダリティの役割

森 芳樹

sein は本当に状態動詞なのか。文学の先生に受けた奥深い質問が、この発表の原点にある。sein が場所句と結びついて、動作的意味となることがある。言語学における現代的な回答は「意味強制」もしくは「再解釈」が起こったとするものである。ところがこの回答には、個々の状態動詞による振舞いの違いを記述できても説明できないという難点がある。

アスペクトに関する意味強制にはどうやらいくつかの種類がある。本論ではまず、上で述べた状態を状態変化として捉える意味強制と逆に状態変化を状態として捉える意味強制の双方が存在することを指摘したい。

そのうえでアスペクト強制とモダリティの関係について考えていく。英語の現在進行形の進行的意味の一部、英語の現在進行形などやドイツ語の現在形の持つ予測型未来指示 (futate/Prospekt) に共通するのは、眼前にある知覚情報が真理条件として機能しないという点である。その代わりにモダリティもしくはエビデンシャリティに関する情報が真理条件を補っていることを示す。その帰結として予測型未来指示に関しては現在に関する言明であるという説を支持する。結果として、これが意味強制、再解釈の一つの例でありながら、モダリティに誘引された語義選択を行っていることを主張する。

口頭発表：文学2 (14:30～16:25)

D 会場 (3353 教室)

司会：平山 令二，真田 健司

#### 1. ゲーテの散文作品における枠物語

木田 綾子

ゲーテの散文作品は、そのほとんどが枠構造を伴う。とりわけ本発表が着目したのは、『ドイツ避難民の談話』(1795) に収められた「メールヒェン」、『親和力』(1809) の「隣同士の不可思議な子供たち — ノヴェレ」、晩年の大作『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(1829) の「新メルジーネ」の三つの作品

である。これらは、作品に収められた挿話にタイトルが付されている点(二つは、ジャンル名が付いている)、挿話の独立性が高く、広い意味で全体と挿話とがパラレルな関係にある点において共通している。

『ドイツ避難民の談話』は、ゲーテが愛読した『デカメロン』に典型的に見られるように、複数の人物が物語る伝統的な枠物語形式である。語られる七つの挿話のうち、タイトルがついたものは「メルヒェン」のみである。『親和力』は、作品全体にはロマーンという副題が、挿話にはノヴェレという副題が付されており、挿話は全体の反空間をなす。『遍歴時代』にはさまざまな話が挿入され、入り組んだ枠構造を形成している。タイトルの付された挿話もいくつか存在する中で、「新メルジューネ」は、「諦念の人々」と副題に付された全体とは全く異質な語り手による物語である。

また、いずれの作品においても挿話の語り手が聞き手にとって馴染みのない存在に設定されており、ここにも注目したい。

本発表は、ゲーテの散文作品を枠物語として捉え、彼の文学観を示すのに枠構造が適していたことを明らかにする。

## 2. 終わらないメルヒェンの現場へ

### — ギュンター・グラス『グリムの言葉』の物語構造 —

杵渕 博樹

ギュンター・グラスの『グリムの言葉』(2010)は、他者(グリム兄弟)の伝記と作者(グラス)自身の記録との重ね合わせと接続を物語の基本構造とする。このふたつのノンフィクション的内容は、ただ並列的に提示されるわけではなく、類似性や連想関係によって結び付けられ、さらには、目撃や出会い、対話など架空の場面の描写が付け加えられる。本作は、内容的には非虚構的性質をより強く持つが、形式としてはその非虚構的枠組を超えようとする傾向によって支えられているのである。この物語構造は、先行する最近の二作品『玉ねぎの皮をむきながら』、『箱型カメラ』における自伝的特性を引き継ぎながら、〈愛する死者をよみがえらせる〉構図において『はてしなき荒野』を踏襲し、さらには、日記的内容と他者の伝記とを二本の柱としていた『蝸牛の日記から』をも想起させる。『グリムの言葉』は、非虚構的諸内容を虚構の次元で統合する形式において、それまでの彼の小説作品の諸形式を要素として包摂しつつ、それら先行諸作品の〈虚構化された自伝〉としての性質を示唆し、同時に、〈反史としての歴史記述を意図する物語〉あるいは〈メルヒェンとしての現実を指向する文学〉としてのグラス作品の総体の傾向を、端的に示している。本発表では、作品受容の現状を踏まえつつ、単なる伝記でもなく自伝でもない独特の物語構造に注目して、本作のグラス作品史上の意味を考えてみたい。

### 3. Lichtenbergs Aphorismen — Metapher als Form der Erkenntnis

Johannes Balve

Der Vortrag widmet sich einem Ausnahmeschriftsteller und Grenzgänger der Goethe-Zeit, Georg Christoph Lichtenberg und seinem aphoristischen Schreiben. Lichtenbergs “Sudelbücher”, eine Sammlung literarisch philosophisch naturwissenschaftlicher Erörterungen prägen in Deutschland die Tradition eines neuen Schreibstils, der in den darauffolgenden Jahrhunderten (Nietzsche/Adorno) Bedeutung gewinnt. Der Vortrag konzentriert sich auf die von Lichtenberg selbst für seine Aphorismen geforderte Erkenntnisfunktion und untersucht, wie sie sich in den Reflexionen der Aphorismen manifestiert.

Selten sind in der Forschungsliteratur bisher rhetorische Stilmittel bei Lichtenberg untersucht worden.

Allerdings wurde die Bedeutung der Metapher für seine Aphoristik bereits mehrfach hervorgehoben (Arntzen, Althaus). Anknüpfend an diese Forschung will ich darlegen, wie Lichtenberg Metaphern verwendet und welchen Wert er ihnen beimisst. Ich vertrete die These, dass die Metapher eine zentrale Funktion als Erkenntnisinstrument in Lichtenbergs Aphorismen hat. Dabei werde ich darlegen, wie sie in diesem Sinne im Spannungsfeld von Empirie und Theorie von Lichtenberg eingesetzt wird.

口頭発表：ドイツ語教育 (14:30～17:05)

E 会場 (3355 教室)

司会：吉村 謙輔, 重野 純子

#### 1. ドイツ語発音指導についての提言

— 「ドイツ語劇」, 「ドイツ語弁論・暗誦大会」の指導体験から

林田 雄二

私が教鞭を執る南山大学では, 毎年, 「学生ドイツ語劇」, 「ドイツ語弁論・暗唱大会」が開催されている。「ドイツ語劇」は, 60年以上の伝統を有し, 「ドイツ語弁論大会」は, 昨年で50回目を迎え, 「ドイツ語暗誦大会」は, 36回目を数えた。これらは, ドイツ語教育の実習部門として, 学科のドイツ語教育の重要な構成要素になっている。私は, 30年近くにわたって, これらの催しに携わり, 少なく見積もっても700人以上, この3年に限ってみても120人ほどの学生のドイツ語の発音・表現指導を行ってきた。ここでの発音指導の目標は, ドイツ語テキストを音声“表現”することであり, ドイツ語の音声を再現することに限定されない。

さて、今年の「日本独文学会春季研究発表会」において、「ドイツ語音声教育の現状と可能性」という題目でシンポジウムが行われた。ドイツ語音声学の成果をどのように授業に取り入れるのか興味深く拝聴したが、“音声”に固執しすぎて、ドイツ語の意味、表現に意識が向けられてない印象を受けた。私の専門は音声学ではなく、文学である。本発表は、音声学的研究の発表ではなく、言うなれば文学（演劇）教育の一環としてのドイツ語発音教育である。

私は、この30年以上にわたるドイツ語発音・表現の実践指導を通して、様々の知見を得た。それらは実践経験から獲得したものであり、学術的な精緻さに欠けるかもしれないが、音声学の研究に、またドイツ語教育に、教育実践という点で刺激を与えることが出来るのではないかと期待している。

## 2. ドイツ語超分節的特徴の習得過程と役割

### — 日本語母語話者を事例に —

村田 優子

日本語母語話者の発音習得に対する研究は、近年は超分節的特徴にも関心が向けられるようになったが、学習者の難点を指摘・考察するものが多く、それらを含めた発音上の全ての特徴を習得する必要があるとみなされるべきかどうか、ドイツ語母語話者とのコミュニケーションにおける役割という観点から考察するものは少ない。

本研究では母語話者から重視され、かつ日本語母語話者にも高度な習得が可能である超分節的特徴を特定することを試みた。まず、ドイツ語を学習する日本語母語話者の学生7名に対し2年間、計2回の発話録音を実施した。テキストを音読してもらい、その超分節的特徴を *praat* を用いて視察し、さらにアクセント数、話速、ポーズ数をそれぞれ計測し、母語話者による音読と比較した。その結果、話速において、1年目と2年目の比較で全ての被験者に上達が見られたが、母語話者との乖離がどのくらい解消されたかは被験者によって差が出た。

さらに、発話録音で得られた1年目の音声を使用してドイツ語母語話者97名に対し発音評価の調査を行った。音声を聞いてもらい、発話内容の理解のしやすさについて *verständlich / fließend / korrekte Wortaussprache / korrekte Satzmelodie / ausdrucksvoll / angenehm / natürlich* の各項目に対し、また発話者の印象について *sicher / selbstbewusst / emotional / freundlich / engagiert* の各項目に対し、それぞれ6段階評価をしてもらった。その結果、話速に関係の深い項目に対する評価は習得度によって差が見られたことと、発話者の印象は発音の習得度に関わらず評価されることが明らかになった。

### 3. Quantitative Visualisierung der Prosodie

#### — Funktionale Datenanalyse bei deutschen Muttersprachlern und japanischen Deutschlernenden

Yuki Asano

Prosodie ist als einer der schwierig zu erlernenden fremdsprachlichen Bereiche bekannt. Diese Schwierigkeit kommt oft in einem sogenannten fremdsprachlichen Akzent zum Tragen. Die vorliegende Studie dokumentiert die quantitativen Unterschiede in der Prosodie von deutschen Muttersprachlern (DM) und von japanischen Deutschlernenden (DL). Sie stellt damit eine empirische Basis für die Entwicklung didaktischer Maßnahmen im Bereich Prosodie bereit. Die Besonderheit an der Studie ist eine innovative statistische Datenanalysemethode, die sogenannte Funktionelle Datenanalyse. Sie ermöglicht die melodischen und rhythmischen Realisierungen unter zwei Gruppen quantitativ miteinander zu vergleichen, ohne die kontinuierliche Kurvencharakteristik der F0-Konturen zu verlieren.

In der experimentellen Aufgabe wurden 15 DM und 15 DL aufgefordert, aufgrund der Kommunikationsfehler ihre Äußerungen mehrmals zu wiederholen. Anhand dieses experimentellen Designs ist es möglich zu analysieren, wie DM und DL die post-lexikalische Information (bzw. ihren zunehmenden Stress) durch die Prosodie markieren.

Die Daten zeigen überall signifikante Unterschiede in den F0-Konturen von DM und DL und negative Transfers vom Japanischen, der Muttersprache von DL: DL variierten kaum ihre F0-Konturen in wiederholten Äußerungen, weil es im Japanischen dem Sprecher nicht erlaubt ist, lexikalische Tonhöhebewegungen aufgrund der post-lexikalischen Information zu variieren. Außerdem wurde selten ein steigender Grenzton produziert, weil eine Äußerung im Japanischen zumeist mit einem fallenden Grenzton markiert wird.

Im Vortrag werden die Nutzung dieser quantitativen Sprachdaten und die didaktische Implikation diskutiert.

### 4. タンデム学習の特長の考察

#### — 言語表出困難場面と話題に着目した会話比較から

北村 美里

タンデム学習は、先行研究で「母語話者と目標言語で話すことや新しいことを試すことへの気後れを緩和する」、「本来の話題を逸れて自分の言語能力を伸ばすためのインターアクションを持つことができる」という点で優れていると

されている。本研究ではこれらの点について、実際の会話を分析することにより検討した。

まず、初対面の日本人ドイツ語学習者とドイツ語母語話者による、日本語・ドイツ語の「タンデム会話」と、ドイツ語のみでコミュニケーションをとる「普通会話」を3組ずつ収録した。次にドイツ語部分（各組約20分）について、学習者の言語表出困難場面における(1)学習者の行動、(2)母語話者の行動、(3)問題解決に続いて行われる学習のインターアクションの頻度を比較し、各組の話題も観察した。

その結果、タンデム会話では普通会話に比べて母語話者からの訂正の助けや学習のインターアクションが多かった。また、学習者の希望する話題のとりあげやすさも観察された。一方、学習者が自ら母語話者の支援を得ようとする行動や母語話者からの支援行動の頻度には顕著な差がなかった。このことは、初対面ではタンデム会話に学習者の積極的な行動を促すほどの影響力がないことに起因すると考えられる。

本研究ではタンデムの有効性が示唆された一方で、普通会話と比べて差の見られない点も確認された。今後は、より日常的な環境での会話収集、長期的な比較、質的分析も加えたさらなる検討が必要である。

ブース発表 (16:00~17:30)

F 会場 (3201 教室)

### ヴァッケンローダーの言語観

馬場 浩平

本発表では、初期ロマン派の精神的支柱でもあったヴィルヘルム・ハイน์リッヒ・ヴァッケンローダー (1773-1798) がその作品『芸術を愛するある修道僧の心情の披瀝』(1797)において1章を割いてある言語論に注目する。そこには、2種類の言語が提示されており、1つは神の語る世界を創造した言語 — 「自然」(die Natur)、もう1つは「選び抜かれた少数の人間」によって語られる言語 — 「芸術」(die Kunst) とされている。本発表では、啓蒙主義を克服しようとしたこのヴァッケンローダーの特異な言語観、特に「芸術の言語」に焦点を当てていく。

近年のヴァッケンローダー研究において焦点となっていたのは、18世紀後半のドイツ語圏で問題となった芸術と宗教の融合としての「芸術—宗教」(Kunst-Religion) の実践においてであった。『芸術を愛するある修道僧の心情の披瀝』の中に登場するルネサンス期の芸術家ラファエロの絵画を礼拝的に受容する修道僧の言葉が、その出発点であった。Ernst Müller は、フランス革命の



ような革命が起こらないプロイセンへの失望から芸術へと逃避するヴァッケンローダーの態度を示している（2004）。Nicole Heinkel は、この『芸術を愛するある修道僧の心情の披瀝』という作品が持つ複数のテキストジャンル性（手紙、芸術家の伝記、芸術論、芸術家の年代記）を指摘している（2004）。本発表では、この作品の多様なジャンル性にも言及していく。

第2日 10月14日(日)

シンポジウム VI (10:00~13:00)

A 会場 (3114 教室)

プラハとダブリン — 20 世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス (その2)  
フリッツ・マウトナーとその射程

**Prag und Dublin — Zwei Topoi in der europäischen Literatur des 20.  
Jahrhunderts (2. Teil) Fritz Mauthner und seine Tragweite**

司会・導入 I: 城 眞一

2008 年 10 月に岡山大学で開催された日本独文学会秋季研究発表会におけるシンポジウム「プラハとダブリン — 20 世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス」から、すでに 4 年を閲した。それ以後も、短期間の空白、若干の構成員の移動があったものの、おなじ問題意識にもとづいて、ドイツ文学とアイルランド文学の、専門を異にする者同士の共同研究がつづけられた。その間、さいわいチェコ文学の研究者をもメンバーに迎え入れることができた。前回のシンポジウムでは、プラハとダブリンの詩人、作家たちにおけるナショナル・アイデンティティの問題をとりあげたが、それは、今回のシンポジウムの前半部において、なお継続されている。ここに、ボヘミアのチェコ語圏に生を享けたドイツ系ユダヤ人であるフリッツ・マウトナー (1849-1923) をキー・パーソンとしてとりあげるのも、故なしとしない。ビスマルクを崇敬するドイツ・ナショナリストとして自己形成をはたしていく、その一方で、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、主としてオーストリア=ハンガリー帝国、なかんずくウィーンとプラハにおいて顕在化した「言語危機 (Sprachkrise)」ないし「言語批判 (Sprachkritik)」を具現する一人として、その言語思想は、いかなる国語をも問わず、あらゆる言語を虚妄と断じ、解体せんと志向するものであった。おなじ一個の人格のうちにはぐくまれながら、およそ二律背反としかみえない、その思想の両極性に相応して、シンポジウム発表の構成もまた、前半と後半に二分されている。前半部は、ドイツ・ナショナリストとしてのその面目が如実にうかがえる、彼の自伝 *Prager Jugendjahre* (1918) と *Muttersprache und Vaterland* (1920) を導入としておこなわれる。マウトナーがえがきだす「プラハの青春時代」は、反面において、言語闘争としてのチェコ民族運動が勢威を増していく、その過程でもあった。おなじひとつの歴史的位相が、民族を異にする者の眼にどのように映じていたか、発表 1 において、石川達夫がその運動の「記号的」性格に即しつつ論じる。さらに発表 2 では、マウトナーに直接には関係しないものの、多くの点でボヘミアとのアナロジーが看取されるアイルランドにおいて、「ゲール語復興運動」がどのような帰趨をたどったか、田多良俊樹が分析する。発表

の後半部においては、一転して、マウトナーの主著 *Beiträge zu einer Kritik der Sprache* (1901-02) に展開されているその「言語批判論」が、20 世紀のドイツ文学とアイルランド文学に、とりわけ排他的なナショナリズムの二項対立をまぬがれているかにみえるフランツ・カフカとジェイムズ・ジョイスおよびサミュエル・ベケットに、それぞれ与えたとおぼしき影響の痕跡を、平野嘉彦と戸田勉がたどっていく予定である。

## 1. チェコの民族運動と言語闘争 — 非自明性打破の手段としての記号的世界の構築と現実化 —

石川 達夫

19 世紀チェコの民族運動は言語民族主義の方向に進んで言語闘争を繰り広げたが、それはハプスブルク帝国内で法的・社会的にチェコ語の使用権を拡大しようとしただけでなく、何よりも文化的に自律的なチェコ語の文化世界を創造し拡大しようとした闘争であった。

この闘争においては、チェコ民族にまとう非自明性を打破する手段として、チェコ民族の記号的世界を構築し、それを現実化しようとする試みがなされた。その際、一方では自明な形で存在しない指示対象（「民族」や「祖国」）を示す記号を盛んに用い、他方では既存の指示対象を示す（ドイツ語の）記号を異なる言語（＝チェコ語）の記号で置き換えようとした。そのため、言語記号と現実との乖離が強く意識されるようになり、一種の言語危機が生じた。つまり、言葉だけあってそれに対応する現実がない、あるいは現実を示す言葉の自明性が失われる、という事態が生じたのである。

チェコ人の場合は、チェコ民族の記号的世界に見合うように現実を創造ないし改造することで記号と現実との乖離を解消していったが、チェコ人とドイツ人の言語民族主義の進展と共に、両者の境界にいたユダヤ人は危機に陥った。

多民族的なハプスブルク帝国において勃興した言語民族主義は、「境界」と「媒体」という言語の二つの機能のうち「境界」を前面に出したが、それは同時に、「媒体」の役割を果たしていたユダヤ人を危機に陥れることになった。

## 2. ゲール語復興とアイルランド民族運動

田多良 俊樹

1893 年にダブリンで創設されたゲール語連盟は、イングランドの植民地支配下で衰退したゲール語を、アイルランドの文語・口語として復活させ、その文学・文化を復興することを目指した。それゆえ、ゲール語復興運動とは、帝国イングランドに対して植民地アイルランドが展開した「言語闘争」であったと

言える。

しかし、ゲール語復興運動はまた、ゲール語の文学的使用を巡って、アイルランド人作家の間に乗り越えがたい対立を引き起こした、いわば「言語的内紛」でもあった。ゲール語連盟が、アイルランド古来の国民文化をゲール語によって振興しようとする一方で、アイルランド文芸復興運動は、民衆説話という形で残存していた国民文化を英語で演劇化する方法を採ったのである。

本発表では、このような「ゲール語主義」と「英語主義」の対立が、ゲール語復興の最終的な失敗を導いたことを論証する。このために、まず、ゲール語連盟の中心人物ダグラス・ハイドの文学作品を参照し、そこにゲール語主義が孕む限界と逆説が典型的に表れていることを確認する。次に、文芸復興運動の主導者 W・B・イエイツのハイドに対する態度を考察し、両者の対立構図を明らかにする。最後に、ジェイムズ・ジョイスが、その評論と文学において、ゲール語主義と英語主義の双方を批判していることを確認し、ゲール語復興という「言語的内紛」の実情を先覚的に捉えていた点を指摘する。

司会・導入 II：平野 嘉彦

### 3. マウトナーとカフカ — 仮説の検証

平野 嘉彦

カフカがマウトナーの著作を読んだかどうか、それを証明するにたる典拠は、目下のところ存在しない。本発表では、いまだ「仮説」にすぎないこのテーゼを「検証」し、その蓋然性の高さを示唆する。ホーフマンスタールの『手紙』(1902)にたいする『言語批判論集』(1901-02)の影響は、すでに著者のマウトナー自身によって看取されていた。他方で『手紙』がカフカの『あるたたかいの記』(1904-07)に作用していることは、ブロートの証言によっても知られる。そのように、マウトナーからカフカへの間接的影響について語ることはできようが、ここではさらに直接的影響の可能性をも付度することによって、世紀転換期にウィーンとプラハにおいて提起された複数の言語思想の布置のなかに、初期のカフカを位置づけることをこころみる。カフカとブレンターノ学派との接点は、P. Neesen によって指摘されているが、ブレンターノを継承したアントン・マルティの『一般文法および言語哲学の基礎づけのための研究』(1908)を引照することによって、Neesen と A. Heidsieck も認めるように、若きカフカがブレンターノ学派に一定の批判的な距離をとっていたことを明らかにする。それとともに、マッハひいてはマウトナーの思想がカフカにおよぼしたとおぼしき影響も、あらためて考量することができるはずである。

#### 4. マウトナーを読むジョイスとベケット

戸田 勉

ジェイムズ・ジョイスはマウトナー『言語批判論集』（1901-02）の名目論的言語観に関心をもち、当時ジョイスに師事していたサミュエル・ベケットに要約するように頼んだといわれている。ジョイスがマウトナーに触れたのは1938年頃であると推測されているが、この時期は彼が作家としての晩年を迎えつつあり『フィネガンズ・ウェイク』（1939）の完成を目前にしていた。また、ベケットは小説家としての最初の長編小説『マーフィー』（1938）を出版し、文学的な方向性を模索している時代だった。

本発表では、マウトナーのジョイスとベケットへの影響関係を検証することを目的とする。特に、マウトナーが『言語批判論集』のヴィーコ論で強調する言語の発展における「詩的隠喩」という概念を軸に据え、ヴィーコの『新しい学』に影響を受けて書かれた『フィネガンズ・ウェイク』と、それに強く感化されたベケットの『ワット』（1953）における言語意識について考察したい。

具体的には、ジョイスが『フィネガンズ・ウェイク』の創作時に書き留めたマウトナーに関するメモを整理し、それらがテキストにどのように反映されているか確認する。ベケットについては、のちの『フィネガンズ・ウェイク』となる「進行中の作品」を論じた評論『ダンテ・・・ブルーノ・ヴィーコ・・・ジョイス』（1929）のヴィーコ論を取り上げ、『ワット』との関連性を論じる。

シンポジウムⅦ (10:00～13:00)

B会場 (3454 教室)

再生—進歩—生存：ドイツ思想史における「超人間化」

**Reform, Fortschritt, Überleben: „Überhumanisierung“ in der deutschen Ideengeschichte**

司会：香田 芳樹

ダーウィニズムへの答えとしてニーチェが用意した綱渡り芸人の比喻は、人間を常に先に進まなければならない過渡的存在として定義した。それは人という種にとって進歩が悲劇的な必然であることをいみじくも伝えている。凌駕され転落する芸人に実存的な意味を見いだすか、宿命的な虚無を見いだすかは、スローターダイクの言葉を借りれば、ヨーロッパ思想史を駆動してきた「超人間化」（Überhumanisierung）への二つの評価によっている。

生の意味を「超越」と捉える人間観は人類には普遍である。古代ギリシアからストア哲学において形成された素朴な神話的回帰や、自然再生（reformatio）の思想は、キリスト教では恩寵論と融合して独自の復活（resurrectio）思想を形

成した。これに対し、信仰による人間の革新 (renovatio) を説くパウロ的「新しい人」は同様に超越世界を志向するが、グノーシス的人間神化への道をも開き、神秘的な再誕生の思想を生んだ。新生への期待がもっとも高まったのは14世紀に始まるルネサンス (Renaissance) であるが、それは古典文芸の単なる復興だけではなく、「世界の発見、人間の発見」(ミシュレ) を目指す進歩思想 (Fortschrittsglaube) でもあった。ドイツにおける人文主義も、「巨人の肩にのった倭人」の巨人を越える試みである限り、再興と革新の二駆動の運動であった。

啓蒙主義によって頂点に達したこの思想は、近代精神を具えた新しい人間を創造主に代わって人間が造りだせると考えた。近代的自我を有しながら、同時に古典的普遍を体現する「大きな人間」の形成が文学の課題となる。しかし、こうした理想は経験主義的な人間観と、フランス革命を経た近代史観に支持される反面、ロマン主義的な心理主義から攻撃されることになる。

19世紀のダーウィンによる進化論は結果的に進歩思想に手痛い打撃を与えた。それは人間を万物の尺度とするプロタゴラス的世界観を一蹴し、人間存在を偶然の産物におとしめた。超越者ではなく最適者に過ぎない人間にとって、生きること (Leben) の至上命令は生き残ること (Überleben) でしかない。ここにおいて生の究極的目的は善から切り離され、道徳は生の周縁に後退する。現代に生きる我々の世界観と生命科学、生命倫理は多かれ少なかれ、ダーウィニズム以降の生存原理によって支配されているが、その反面、それ以前の再生、進歩の思想によって進化論的宿命論を乗り越える必要性も自覚している。その際に、19世紀に登場し、近代を象徴する概念となった「大衆」を考察することは、これが生物学的な種や類を越える人間の社会学的規定であるがゆえに、一層重要であろう。大衆を創出する「技術」が、人間にどのような超越的価値を付与するかは、この議論を締めくくるものである。上記のような視点にたつ、相互に関連する5つの発表によって、本シンポジウムでは、主としてドイツ思想史における Überhumanisierung の意義を歴史的に検証したい。

## 1. 「わたしは若木のような新たな姿となって星々にのぼっていく。」

### — 古代から中世にいたる「死と再生」の形象について

香田 芳樹

古来、歴史は生と死と再生を繰り返す生態系のように、老化するシステムを移転させながら生まれ変わり、発展していくと考えられた。ギリシア文明も、ローマ帝国も、キリスト教もそれぞれ、ルネサンスと、神聖ローマ帝国と、宗教改革によってヨーロッパを移動しながら、命を革 (あらた) めた。このように歴史学が、reformatio, revolutio, restauratio, renovatio, renasci といった概念によって自らを生態史観のもとに叙述することの根底には、世界が植物的再生と、

コスモロジックな回帰に深く組み込まれているという確信がある。可視的次元で繰り返される歴史と個体の生命の更新は、超越論的な救済の重要な前提でもある。Gerhart Ladner は „The Idea of Reform “ (1959)で、ストア派とアウグスティヌスを例に、神話的再生信仰が歴史意識だけではなく、西欧人の宗教観の根底もなすことを論じたが、本発表では視点を 14 世紀以降の中央ヨーロッパに移し、再生思想の文学的受容をミンネザング、ダンテの『神曲』、トリスタン物語に、また終末論から宗教改革に続く、再生論のキリスト教的な変容をマイスター・エックハルトやビンゲンのヒルデガルトの思想の中に見ていく。これにより、ルネサンスを準備する時代が、アリストテレス的「生成—消滅」論に抗し、プラトン—ヘルメス的な死生観のもとに、「新しい人間」の形成を模索したことを明らかにしたい。

## 2. 神の似姿としての宇宙・国家・人間

### — シラーのカバラ的神人同形論

坂本 貴志

シラーは戯曲『ドン・カルロス』(1787)の中で絶対主義国家批判を展開する。各人の各人に対する戦争状態を回避し「コモンウェルス」を確立するためにホッブスが不可避と見た「人工的人間／リヴァイアサン」の絶対主義国家は、ポーサによれば、君主個人の精神を拡大した「大きな人間」ではあるものの、それを構成する個人そのものは自由を失い、人類として持つべき「総体性」の断片しか持ち合わせず、国家の中で歯車として機能するよう隷属化している。シラーの詩『友情』(1782)、『美的教育書簡』(1795)を合わせて俯瞰するならば、『ドン・カルロス』において浮かび上がる人間の理想像は、神性の写しとしての自由な主体である。そしてこの主体が構成する共同体(「魂の王国」)は、宇宙論的レベルで見れば神の属性を写し出し、また世俗的レベルでは「美的国家」のモデルとなる。人間と国家と宇宙とを互いに相関・照応するものとして捉える視座は、プラトン、キケローの国家論以来ルネサンスを経て、シラーに現れる一つの伝統ではある。ここに、神の似姿としての人間という神人同形論—その根源はカバラ的な神秘主義に求められる—が近代的な人間の「形成(Bildung)」の議論として作用する様を検討するのが本発表の主旨である。

## 3. Incipit vita nova — 「新生」への夢

今泉 文子

啓蒙主義の勃興ののち、増大する知の展開のなかで「人間とはなにか」がさまざまに問われ、他の動物とは異なるものとして、魂、理性、徳性というものに

<人間>の存在根拠が求められていく。いわゆる神概念の内在化に呼応するかのように Geist が、模糊たる Geister の世界からひとり脱して、「近代精神」として新たな誕生を迎える。この新しい精神は、人間の知的活動の主座に立ちつつ、改めて己を理性として祀り上げ、ひとつの大回転 Revolution を引き起こす。「繁栄—衰亡—再生」という triadisch な歴史感覚の中で、現実の Revolution は、「命、革まる」出来事として、um 1800 の時期を覆う意義深い表徴となり、時代の文学的テキストのなかでも、「新たな生」、「新しい人間」が求められる。これらの文学的形象は、直線的な進歩を標榜する Modernisieren の流れのなかに置かれながら、たえずそれが取り消されるといった ironisch な言表のうちに提出された。本発表では、F.シュレーゲルの「新しい神話」論を切り口に、ゲーテの『ファウスト』第二部とノヴァーリスの『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』における「新しい人間」誕生のシーンに焦点を当てて、いまや問題的なく近代 > の、その開始期における <文学> ならではの新生への夢の位相を見定める。

#### 4. ダーウィニストとしてのニーチェ

##### — 道徳の博物誌からディオニュソス的な肯定へ

清水 真木

『種の起原』は、現在の進化論生物学の基礎をなす点において重要であるとともに、ヨーロッパの知的世界全体に衝撃を与えた点においてもまた、無視することのできない著作である。とはいえ、『種の起原』は、その衝撃にもかかわらず、20世紀初めまで深刻な誤解にさらされており、ニーチェ自身のダーウィニズム理解もまた、当時の平均的な水準を超えるものではなかった。しかし、ニーチェのテキスト、特に系譜学には、ダーウィンの「系統学」を想起させるような概念枠が認められる。両者はいずれも、観察可能なものを手がかりにその起源を再構成する作業であり、すべてを歴史的な相のもとで見ると一致している。両者の試みのあいだには、並行的な関係を認めることが可能なのである。この発表は、ダーウィニズムの観点からニーチェの思想、特に系譜学とニヒリズムをめぐる言説に照明を当てることにより、新しい哲学史的文脈のもとでニーチェのアクチュアリティを吟味する。ダーウィンの進化論生物学とニーチェの系譜学が思考の枠組を共有しており、両者が並行的な関係にあることを確認すること、さらに、このような枠組に対し、新プラトン主義といわれる「言語論的転回」とをつなぐ位置を与えることが具体的な目標となる。



## 5. エルンスト・ユンガーの有機的構成 (organische Konstruktion) と ベンヤミンの集合体 (Kollektivum) について

大宮 勘一郎

エルンスト・ユンガー (Ernst Jünger) は、評価の分かれる著作"Der Arbeiter" (1932) において、19世紀的市民の末裔と彼が呼ぶ「大衆 Masse」に代わって、新時代の Herrschaft を担うべき存在として、「労働者 Arbeiter」を指名し、その組織的一体の原理である「有機的構成 organische Konstruktion」の概念を呈示した。これに対してヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin) は"Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit"(1936) において、同じく非-市民的存在として「プロレタリアート Proletariat」を名指し、既存の仕方で制度化されていない集合的知覚の持ち主たる「集合体」としての彼らに「芸術の政治化」を託す。

ユンガーが「有機的構成」を「1860年の劇場における正面上席が映画やスポーツ・リングの列なす観客席と異なるのと同じように、旧来の社会における集会とはまるで異なる活動を呈する僚友的共同体」と表現する一方、ベンヤミンは「人間集合体の存在様式」と、同じその「集合体の知覚」が共軌的に変化することを確認したうえで、光学的複製技術装置の貫入によって変容する知覚に、新たな集合体の可能性を認める。ユンガーもベンヤミンも、ともに脱19世紀、脱市民、脱個人的な「人間」の新たなあり方を「技術 Technik」との関係において模索し、この点において表面上の政治的立場の大きな差にも拘わらず接近していたのである。

とはいえ、両者がどの点で異なっていたのかを、上記の両理念の踏み込んだ検討から明らかにすることが重要である。両者の差異は、もはや根拠を失いつつあった19世紀の人間中心主義を技術との交渉という観点から再検討する際に浮上する、技術の政治的両義性に対応するものであると考えられる。また、両者ともに、人間という類の進化や発展という文脈ではなく、むしろ類としての重大な危機を背景とした「更新」と「生存」の可能性を問う議論を試みたのだと考えるべきである。

20世紀前半における人間観の変動を、近代の諸原理及び制度に対する懐疑との関係で論じる本発表は、本シンポジウムにおいて、近代から脱近代への過渡的ないし架橋的議論として位置づけられる。

## フクシマ後のドイツ文学 — 語り・行動・パースペクティヴ

**Deutsche Literatur nach „Fukushima“ — Erzählweisen, Handlungsspielräume, Perspektiven**

司会 : Mechthild Duppel-Takayama

コメンテーター : 寺尾 格

2011年3月11日の三重の複合災害、とりわけ福島第一原発での事故は、「フクシマ」の名のもとにグローバルな事件として世界に受け止められ、多くの人々の世界観や認識を揺るがした。文学者や文学研究者もその例外ではない。この災害を契機として、私たちにこれまでのあり方の再考を迫る新たな文学や思考が生まれつつある。本シンポジウムは、ドイツ語圏の文学を手掛かりに、「フクシマ」とそれがもたらした余波に関して活発な議論を行うことを目指すものである。

エルフリーデ・イエリネクの『光なし *Kein Licht*』(2011) および『エピローグ? *Epilog?*』(2012) は、震災と原発事故に対する文学的反応のなかでも、もっとも初期の例である。イエリネクはこの二つの演劇テキストにおいて、私たちの直面している全貌の見えない問題を重層的な言語を用いて描き出し、倫理的・人間学的なパースペクティヴから考察を展開している。一方で、こうした狭義の文学的なテキストだけにとどまらず、ノンフィクション的なジャンルに属し、より「事実」や「現実」に近いとされるルポルタージュもまた、災害およびそれに伴う一連の出来事を物語り、描写する可能性とその限界を如実に示す。その例として、日本滞在中に震災を体験した二人のドイツ人、ZDF 記者ヨハネス・ハーノと日本学者ラインハルト・ツェルナーによる二つの対照的なルポルタージュ作品をとりあげる。

なお、本シンポジウムのタイトルには、時間的な区分に着目する(2011年3月11日以後に書かれた文学)とともに、過去の文学作品を「フクシマ」の体験に照らして読み直す(2011年3月11日以後に読まれる文学)という、二つの視座をひらく狙いがある。この意味で、とくにハインリヒ・フォン・クライストの『チリの地震 *Das Erdbeben in Chili*』(1805/06) に新たな光をあてる。近代民主主義をめぐる議論の黎明期に書かれたこのテキストは、震災以後、政治への不信と市民運動の活発化という文脈を経てアクチュアルなものとなった民主主義についての問いを、歴史的な見通しのなかに捉え直し検討するための積極的な契機となりうる。また、同じく震災以前に書かれたテキストでありながら驚くほど予言的な題名を付された、ペーター・スロータダイクの哲学的エッセ

イ『生き方を変えよう Du mußt dein Leben ändern』(2009)も、挑戦的な要求として経験される世界において、人間に残された行動の余地とは何かを問うている。スロータダイクはここで文学的事例(リルケ、カフカ、シオラン)にも触れつつ、危機に直面した人間が生き延びるための戦略について慎重に考察していることから、本シンポジウムの問題提起に対するこのテキストの重要性が裏づけられるだろう。

「フクシマ」をめぐる語りと行動、そしてそれを可能にする視点と見通しを、「文学」の言葉のなかに求める本シンポジウムの試みは、今日の文学が担いよう様々な機能と役割を問い直すための端緒となるはずである。

## 1. 拡散する文学

### — エルフリーデ・イエリネク『光なし』における追跡

井上 百子

2011年3月11日に起こった東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所での事故は、単に日本の局所的問題としてではなく、資本主義的な利権追求社会を志向する人類全体に投げかけられた疑問として捉えられる。以前からこういった社会や人間のあり方に再考を迫る数々の作品を執筆してきたオーストリアの作家エルフリーデ・イエリネクは、福島での事故を機に『光なし *Kein Licht*』(2011)を発表した。この作品は2011年9月29日にケルンのシャウシュピール劇場で初演(演出:カリン・バイアー)、日本でも同年12月にリーディング公演(邦題:『光のない。』、演出:長谷川寧、翻訳:林立騎)が行われた演劇テキストである。イエリネクは『光なし』の末尾で、参照した文献としてソフォクレス『追跡者としてのサテュロス』などの題名を挙げる。16万人の住民が未だ避難を余儀なくされ、展望の見えない災害へのリアクションという性格を持ったテキストで、イエリネクはなぜ滑稽で笑いを誘ったと考えられる古代ギリシアのサテュロス劇を使用したのだろうか。また無味無臭かつ目に見えない猛毒の放射能はいかにして描きうるのか。本発表ではイエリネクの重層的な言語の分析を通してこういった具体的な問いを考察しつつ、福島原発の事故を単純化して捉えるのではなく、複合的な問題として思考するひとつの手法を提示したい。

## 2. ルポルタージュは震災を伝えられるか

### — J・ハーノとR・ツェルナーの日本滞在記を中心に

川島 隆

ルポルタージュは一般に「ノンフィクション」的なジャンルと見なされている

るが、実際には、その起源にある旅行記文学の伝統からも窺えるように、現実のできごとを「物語」として再構築するという性格がある。そこには、語り手の主観が強く反映されることになる。2011年の東日本大震災から数ヵ月後に刊行された、ヨハネス・ハーノの『日本の震災 フクシマとその余波 Das japanische Desaster. Fukushima und die Folgen』と、ラインハルト・ツェルナーの『日本。フクシマ。私たち。 Japan. Fukushima. Und wir.』は、震災と原発事故を異なる角度から描くルポルタージュとして、語り手の異なる立場をはっきりと照らし出す。ZDF 東アジア総局長ハーノは、自身のジャーナリスト活動上の体験を物語る一方、事故の重大性を隠蔽しようとする東京電力・日本政府のメディア戦略と、放射能の危険性への意識を欠いた日本人（の大多数）の反応への違和感を表明する。それに対して日本学者のツェルナーは、日本の危機を報じるドイツのメディアの過熱ぶりを批判し、これを多くの統計的資料によって相対化することを試みた。ここに、ドイツにおける「フクシマ」受容の二つの典型的な態度が表れている。事故を招いた日本の原子力政策に批判的な語りは、結果的に、日本社会の構造や日本人の行動の特殊性を強調しがちである。逆に、日本の「普通」さを強調する言説は、東電や日本政府を免罪し、ひいては原発をめぐる問題の所在を覆い隠すことにつながっている。

### 3. 震災後の民主主義を構想する

#### ー ハイน์リヒ・フォン・クライスト『チリの地震』

西尾 宇広

原発事故を経て、議会外における民主主義的实践（デモや社会運動）の可能性がつかない規模で具体化しつつある震災後の状況は、「民主主義」の再考を急務の課題として要請している。この点で、H. v. クライストの『チリの地震』（1805/06）は重要な示唆を含んだテキストである。民主主義という主題からこのテキストを読み解く試みはこれまでなされてこなかったが、作品が成立した世紀転換期は、政治不安が極度に高まった動乱の時代であったと同時に、新たな社会秩序への展望の中で民主主義をめぐる議論が盛んに行われた時期でもあった。17世紀の歴史的な震災に取材し、被災地における混乱と共助、そしてかつての社会秩序の暴力的な回復の過程を劇的に描き出したこの作品が現在もっているリアリティは、その実、民主主義の実践に深く関わるものなのである。

本発表では、「民主的 demokratisch」という言葉が印象的に用いられたクライストの後年の政治評論「オーストリア救国について」（1809）を補助線に、彼の民主主義観の変遷を俯瞰し、その変遷過程の最初期に位置する『チリの地震』の意義について検討する。民主主義という制度／理念の価値がいまだ定まらぬ時期に書かれたこの作品において、作者自身の民主主義に対する評価は両義的

なものにならざるをえなかった。その両義性のうちに来たるべき民主主義の時代への予感を読み取り、そこから現在の状況への歴史的な示唆を得ることが、本発表の課題である。

#### **4. Peter Sloterdijks *Du mußt dein Leben ändern* und der Atomunfall von Fukushima**

Herrad Heselhaus

Der Vortrag stellt Peter Sloterdijks 2009 erschienenen, ca. 700 Seiten langen philosophischen Essay *Du mußt dein Leben ändern* vor. Zwar wird gerade eine englische Übersetzung dieses Werkes erstellt, aber eine japanische Version liegt trotz der Katastrophe vom 11. März 2011 bedauerlicherweise noch nicht vor. In dieser Abhandlung entwickelt Sloterdijk ein Bild des Menschen als homo anthropotechnicus. Dieses Verständnis des Menschen findet Sloterdijk sowohl in uralten religiösen und philosophischen Traktaten als auch in modernen Texten aus den Bereichen von Literatur und Philosophie. Seine auf diese Forschung gründende Lesart von Rilke, Kafka und Cioran erfährt durch den Atomunfall von Fukushima eine zusätzliche Kontextualisierung, die zu einer Zuspitzung der anthropologischen Problematik führt. Während die meisten deutschen literarischen und journalistischen Texte, die sich auf „Fukushima“ beziehen, eine pessimistische Haltung einnehmen – so auch Yoko Tawada und Elfriede Jelinek –, ermöglicht Sloterdijks theoretischer Ansatz, Handlungsspielräume und Erkenntnispielräume wahrzunehmen und zu erweitern. Der Vortrag will Sloterdijks Thesen, die literarische Perspektive sowohl wie die anthropologische Modellierung, angesichts von „Fukushima“ erproben und zur Diskussion stellen.

口頭発表：文学3（10:00～12:35）

D会場（3353 教室）

司会：野口 薫, Hans Joachim Detlefs

#### **1. トーマス・マンの作品執筆における私的朗読会の役割について**

— 『ファウストゥス博士』執筆時の日記を主な手掛かりとして

及川 晃希

トーマス・マンは、執筆途中の作品を家族や親しい友人の前で朗読する習慣があったが、彼はその際に聴き手から出た意見を参考にして作品を書き変えることがあった。書き下ろし作家トーマス・マンにとって、私的朗読会は、いわ

ば連載執筆の代替として、作品に対する客観的な視点を導入し、また、読者の反応を知るために重要な役割を果たしていたと考えられる。

本発表では、『ファウストゥス博士』(1947)執筆時のマンの日記を主な手掛かりとして、この朗読会と創作の関係について扱う。『ファウストゥス博士』の執筆過程に関しては、マン自身が作品執筆時期の日記に依拠して書いたエッセイ『ファウストゥス博士の成立。小説の小説』(1949)があるが、このエッセイは、マンの日記の編者 Mendelssohn(1981)も指摘しているように、「小説の小説」という副題の意味に即して年代や具体的事項がかなり自由に処理された読み物の側面が強いため、作品の執筆過程を実証的に分析するためには日記も参照する必要がある。また、『ファウストゥス博士』の成立過程に関する先行研究は、たとえば Dörr(1983), Bahr(1989), 仲井(1994)など、アドルノとの音楽上の協力関係にほぼ集中しており、執筆中の朗読会を通してアドルノ以外の人間が創作に与えている影響についてはあまり関心が向けられてこなかった。しかし、日記の記述からは主に私的朗読会を通して、アドルノ以外の人間もマンの創作に影響を与えていることを知ることが出来るのである。

## 2. 「ギーゼルヘルの家臣」ダンクワルト

### — 『ニーベルンゲンの歌』の詩人が創作した人物の意義

野内 清香

『ニーベルンゲンの歌』は、ホイスラーの段階発展説によれば、前半と後半で元来別々の由来を持つ伝承が段階的に変化し、1200年頃の匿名の詩人により長大かつ緊密な構成をもった叙事詩として成立したものである。伝承の発展とともに徐々に登場人物が増加したが、ハゲネの弟ダンクワルトは『ニーベルンゲンの歌』の詩人が新たに創作した人物である。本発表ではダンクワルトとブルゴント王家の末弟ギーゼルヘルとの対応関係を指摘し、罪なき若者として設定されたダンクワルトの重要性について論ずる。

ダンクワルトは写本 A と B の一部で「ギーゼルヘルの家臣」des chunich Giselheres man(写本 B, 513)と呼ばれている。現在一般的に用いられるブロックハウス版等のテキストでは、この箇所は注釈つきで「グンテルの家臣」と訂正されているが、詩人はダンクワルトとギーゼルヘルを関連付けるためにあえてそのように述べた可能性がある。ブルゴントの三人の王の中で、ギーゼルヘルだけはジーフリト殺害に無関係で、汚れのない若く立派な騎士として描かれており、それに対応する人物としてハゲネの側にも配されたのがダンクワルトなのである。

この罪なき若者をフン王の弟が襲撃したことからブルゴント族とフン族の戦闘が始まったことにより、聴衆の心理はブルゴントが善、フン族が悪という図

式に誘導される。ハゲネがジーフリト殺しの大罪にも拘らず英雄的行為を行うことができるのも、この弟の存在によるところが大きいのである。

### 3. リヒャルト・ヴァーグナーにおける概念「退廃 (Entartung)」の変遷

山崎 明日香

中世に由来するドイツ語「退廃 (Entartung)」は、19 世紀を通じて民族的・文化的・医学的な文脈で否定的に展開した。そして 20 世紀初頭にはナチスの支配概念として利用される。本発表では従来まで見過ごされてきた、リヒャルト・ヴァーグナーにおけるこの概念の変遷を、同時代の用例を手がかりに検証する。またこの概念が、彼の思想を支える否定的なメタファーとして機能している点をあわせて追及する。

ヴァーグナーにおける「Entartung」の概念は、啓蒙主義的な歴史叙述や文化悲観主義の影響のもとで、ある民族の歴史的な衰退を表すだけでなく、1843 年にはすでに現代芸術や宗教を批判するための「病理化のメタファー」として用いられている。またヴァーグナーの最晩年の再生論文においては、この概念が、近代人を文化的また生物学的に否定する用語へと発展している。これに影響を及ぼしたのは、グレースの進歩主義的な生活改革運動や、ゴビノーの生物学的な人種論、さらに社会ダーヴィニズムであった。19 世紀初頭から世紀転換期に至るまでの概念「Entartung」の変遷は、民族主義や人種主義のナショナリズムの潮流から、ニーチェやマックス・ノルダウを介した退廃言説の蔓延と密接に関わっていた。ヴァーグナーにおけるこの概念も、このような流れのなかで展開している。彼はこのメタファーを通じて、ある民族や人種に対する否定的観念を付着させたのみならず、彼の国民文化的なユートピアの形成を試みたのである。

### 4. Zur Dramaturgie des Schweigens

#### — Kundry in Richard Wagners *Parsifal*

Chikako Kitagawa

Kundry, die einzige weibliche Hauptfigur des Parsifal, wirkt operngeschichtlich als ein singuläres Phänomen, indem sie sich im III. Akt fast völlig ins Schweigen zurückzieht. Dieses Verstummen bildet in der von Wagner angestrebten Synthese von Dichtung, Tonkunst und Gebärdenspiel gleichsam eine Lücke. Dadurch polarisiert sich der Ausdruck dieser Figur: Er tendiert einerseits zu unmittelbarer körperlicher Präsenz, er verdichtet sich andererseits in einem psychologisierenden Orchesterkommentar; eine Darstellungsform entsteht, die zukunftsweisend erscheint.

Das Verstummen Kundrys hat eine Vielzahl gegensätzlicher Deutungen provoziert. Es ist zum Beispiel als Ausdruck eines Emanzipationsstrebens (U. Kienzle), als Verlust an Aktivität (S. Wurz), als Marginalisierung (Th. Koebner) oder gar als „Vernichtung“ im Sinne eines antisemitischen Impulses (R. Kreis) aufgefasst worden. Demgegenüber möchte mein Versuch gerade jene unaufhebbare, irritierende Ambivalenz, die Wagners Dramaturgie des Schweigens prägt, hervorheben.

So scheint Kundrys Rückzug ins Schweigen mehr als bloße „Verneinung des Willens zum Leben“ (Schopenhauer) zu sein. Denn der Orchesterkommentar, der zu Kundrys Verwandlung im III. Akt erklingt, weist gleichzeitig in eine ganz andere Richtung; er greift Motive auf, die im II. Akt die Sphäre des Eros entfaltet haben. Im Zusammenspiel der dichterisch-szenischen und der musikalischen Konzeption oszilliert somit das Geschehen stets zwischen Eros und Askese. Das wirft zugleich jene grundsätzliche Frage auf, der Th. Mann im Doktor Faustus nachspürt: ob sich in Musik – in einem elementar sinnlich, ja triebhaft anmutenden Geschehen – überhaupt etwas wie Askese artikulieren lässt.

口頭発表：文化・社会 (10:00～11:55)

E会場 (3355 教室)

司会：早坂 七緒, 新井 裕

## 1. エルフリーデ・ローゼ＝ヴェヒトラーの裸体自画像をめぐって

二階堂 まち子

自画像には、画家の自己認識や理想像が投影されている。そのため、「描く者」としての画家の自画像は自身のアイデンティティと深く結びついている。一方、女性とりわけ裸婦は美術においては「描かれる物」として非常に好まれてきたモチーフである。神話の一場面としてであれ、抽象的な事象のメタファーとしてであれ、女性は自ら描くことは少なく、もっぱら描かれ続けてきた。この状況は、「古典的モデルネ」の新しい芸術潮流においても、ほとんど変化していない。それどころか、女性はより直接的に性的対象として男性芸術家の「能動性」と「才能」を担保するという役目を担わされることになった。こうした時代に芸術家として生きた女性は、自らをどのように理解し、演出し、提示しようとしたのか、ヴァイマル期的女性芸術家エルフリーデ・ローゼ＝ヴェヒトラーのパステルによる裸体自画像 *Selbstbildnis im Spiegel* の分析を通じて考察する。

女性画家による裸体自画像は、当時はまだ珍しく、また、ローゼ＝ヴェヒトラーのこの作品においては、「明確な自己演出」の欠如が特徴的である。記号的な自己演出を避けることは、しかし、強烈な自己主張にもなり得る。一見、感



情的な要素も装飾的な要素も排したローゼ=ヴェヒトラの裸体自画像は、「自画像」「裸婦」および「女性と/の芸術（家）」という三つのテーマが交錯する場であり、1920～30年代のドイツの芸術を考える上で重要な視点を提示しているのではないか。

## 2. 文献学と歴史 — グリムからベンヤミンまで —

宇和川 雄

本発表ではまず、グリム兄弟の「些末なものへの畏敬心（Andacht zum Unbedeutenden）」をめぐってドイツで繰り広げられた、文献学論争の系譜をたどる。「些末なものへの畏敬心」という言葉は、そもそもは些末な伝承を貴重なものとして扱うグリム兄弟の研究姿勢に対する辛辣な比喩だった。しかし後にこの評価は一転し、一見些末なものに細心の注意を払うその姿勢こそが、文献学の理想とみなされるようになる。A・W・シュレーゲルとW・シェーラーを主な論客とするこの論争の第一の局面は、J・グリムの没後に一定の決着をみる。しかし論争は1930年代に再燃し、ベンヤミンを中心とする第二の局面において、グリム兄弟の文献学は新しい歴史哲学へと変貌する。

この論争に関するこれまでの研究は、いずれも断片的なものにとどまっている。グリム兄弟の文献学をレヴィ=ストロースの人類学と比較したU・ヴュスの研究では、第二の局面における文献学の変化が検証されていない(Wyss 1979)。また第二の局面にいち早く注目したG・アガンベンの研究では、今度はこの変化を第一の局面との連関でとらえる視点が欠けている(Agamben 1978)。しかしこの二つの局面を通史的にとらえたときにはじめて、グリム兄弟とベンヤミンに共通する — そして同時に鋭い対照をなしている — 文献学の精神を明らかにすることができるだろう。本発表では最後に、グリムからベンヤミンまで続くこの文献学論争が、現代の「記憶の場」(Nora 1989)においてもちうる豊かな意味を確認する。

## 3. 絵画における疾風怒濤の一系譜

— フュスリとフューゼリにおける独創性を中心に

今村 武

チューリヒでボードマーの薫陶を受けたヨハン・ハインリヒ・フュスリは疾風怒濤詩人として創作するも、若くしてイギリスに渡り画家として活躍する。本発表の研究対象は、ロイヤル・アカデミー絵画教授となった詩人、翻訳家、美術史家、画家フュスリ/フューゼリのとりわけ美術分野における創作活動と、文学的関心との関連性である。

フューゼリの絵画作品は、シュトゥルム・ウント・ドラングの一つのヴァリ

ーションとして理解出来るはずである。1760年代のチューリヒ疾風怒濤を代表する詩人フュスリの画家としての作品群は、幾つかのキーワードを提供する。

「神話」「中世」「独創性」「社会性」等のかれの絵画作品から抽出される重要な概念は、疾風怒濤の核心を成している。本発表では特に「独創性」に着目し、画家フュスリの美術を疾風怒濤研究の視点から説明したい。フューゼリの美術分野における作品群を疾風怒濤研究における重要概念との関連性からアプローチする必要性を明らかにすることとなる。また素材としてのシェイクスピアやダンテは、画家フューゼリの作品と理論における「独創性」から再考されるべきであろう。

ドイツ語圏スイスにおけるシェイクスピア、ダンテ受容から、イギリス・ロマン主義芸術家ウィリアム・ブレイクに直接繋がるフューゼリの美術を、シュトゥルム・ウント・ドラング的キーワードから説明することで、より広範な比較文化的研究という今後の課題も示したい。

ブース発表 (11:30~13:00)

F会場 (3201 教室)

### 心態詞が作り出すリズム・イントネーションと意味・機能の関係

牛山 さおり, 生駒 美喜, 岡本 順治

本発表は、発表者が共同研究として行なってきた「ドイツ語心態詞の状況依存性、意味・機能、音声的特徴との関わりについての実証的研究」における研究成果の一部として、ドイツ語心態詞の発話の韻律的特徴、中でも特にリズムに関する音声分析の成果を報告する。

先行研究により、心態詞の意味・機能には韻律的特徴が密接に関わっていることが明らかになっているが、その一方で、発話における心態詞の有無や心態詞のアクセントの有無と、発話全体のリズム・イントネーションが重要に関わっている可能性がある。

そこで、A) 異なるリズムの特徴が現れやすいと推測される denn の短文、B) 心態詞を入れた形が慣習化して用いられている „Das ist ja toll! “ „Das ist aber toll! “ といった複数の短文を状況文に埋め込んだ形で作成した発話資料を、ドイツ語母語話者に発話してもらい、音声分析ソフト Praat を使用して分析した。その結果、A)においては、本来アクセントが置かれるとされ「繰り返し」の意味をもつ denn が、文中の位置によってはアクセントを持たないというケースが観察され、B)の慣習化されて使われる文の場合には、リズム面ではさほど変化がなく、文全体のイントネーションに変化が確認された。

本発表では上記の分析結果を報告し、リズム・イントネーションを含めた心

態詞の韻律的特徴について議論を深めたい。